脱サラした元勇者は手加減をやめてチート能力で金儲けすることにしました

年中麦茶太郎
Mugichatarou Nenju
Illustration 六時

全力試し読み版

GA文庫

大したことじゃない。
会社を辞めることにしたんだ。
むしろ今までが
どうかしていたのです。
お兄様は企業に仕えて
一生を終えるスケールの小さな
男ではありませんもの。
天堂シヅル てんどうしづる
雷輝の最愛の妹。
天才的な頭脳を持ち、雷輝の真なる目的を
公私とも支えている。
天堂雷輝 てんどうらいき
かつて世界を救った勇者。
そして今は才気あふれるビジネスマン。若き営業
部長の肩書きを捨てて、自分の会社を立ち上げる。

株式会社"凱旋計劃"
代表取締役社長
"天堂雷輝"
業務上の
都合により
推して参る

プロローグ

白い病室に、十代半ばの少年が一人いた。

彼は頭も腕も足も、あらゆるところが傷だらけで包帯で覆われている。誰もが目を背けたくなる惨状。本当ならベッドで絶対安静にしているべきだと一目で分かる。

しかし彼は自分の足で立ち、そして瞳は少女に向けられていた。

妹だ。

九歳年下の、まだ小さな妹。

ベッドで静かに眠る彼女は……生きているのが不思議なほどの重体だった。傷だらけ、などというものではない。彼女の体からはいくつも管が伸び、機械に繋がれ、辛うじて生きている。

意識は当然ない。心臓は動いている。それだけだ。呼吸も自力では不可能。

少年にとって、妹だけが唯一残された肉親だった。父も母も死んでしまった。

あの日。故郷の町に大型マガツが現れた日。他の大勢の人と一緒に殺されたのだ。

少年は死にもの狂いで妹をかかえて逃げて逃げて、何とか生き残った。

しかし、妹は。これは生きているというのだろうか。助けたことになるのだろうか。

これはまだ、助けたことになっていない。だから、助けたい――。

「ならば少年。ギドラニア神聖帝国に来たまえ。君の力を歓迎しよう」

手は意外なところから差し伸べられた。

「この国も先進国だが、我が神聖帝国には遠く及ばない。神聖帝国の技術なら、君の妹は助かる。しかし条件がある。君の力が欲しい。君は十歳になる前から両親の造った魔導兵器を使ってマガツ狩りをしてきた。程なくして地元で一番のハンターになり、そしてあの厄災からも生き延びた。ああ、素晴らしい才能だ。君の力は神聖帝国軍で活かすべきだ。きっと騎士になれるよ。いいや、もしかしたら勇者になれるかもしれない。さあ、どうする?」

答えは決まっている。論ずるまでもない。それで妹が助かるなら。そしてマガツを倒す力が手に入るなら。この空を守る力が欲しいから――。

「よろしい。ギドラニア神聖帝国は君の決意に敬意を表するよ」

そして妹は助かった。少年は力を手に入れた。勇者の中でも最強と呼ばれ、それどころか人類史上最強とまで噂された。

だが、だからこそ。最強を極めたからこそ。そんな力では空を守れないと知ってしまった。

chapter 01

第一章　史上最強のニート

「天堂課長。八嶋魔導重工の八嶋彩花様から外線一番にお電話です」
定時をとっくに過ぎても誰も帰ろうとしないオフィス。天堂雷輝は部下の声を聞き、タイプライターから視線をずらした。
「八嶋？　分かった、繋いでくれ」
雷輝は外線一番のボタンを押し出る。
「お電話変わりました。天堂です」
「あら、ビジネスライクな口調はやめてちょうだい。今何時だと思ってるのよ。ねえ、今から食事に行きましょう。素敵な店があるの」
受話器から流れてくる声は、若い女性のものだった。とても取引先の人間に対する声とは思えないほど馴れ馴れしく、そのことに雷輝は苦笑してしまった。
「そっちはどうか知らないけど、こっちはまだ仕事中なんだよ」
部下たちの目もあることから、雷輝は声を潜めて返答する。
「知ってるわよ。自宅にかけても出ないから、こうして会社に電話したんじゃない。ねえ、そん

なの明日にしなさいよ。やっと予約が取れたのよ。それとも私と食事するのが嫌だって言うの？」

返ってきた言葉に、雷輝は呆れ果てた。

こちらの都合も聞かずに勝手に予約を入れておきながら、嫌も何もない。

「悪いが明日の会議に必要な書類を作ってるんだ。今日中に終わらせたい。また誘ってくれ」

すると想像したとおり、ヒステリックな叫びが飛び出してくる。

「私と会うより仕事のほうが大切だって言うの⁉　信じられないわ！」

そして弁解する間もなくガシャンと電話は切れてしまう。

八嶋彩花は梵珠王国でも有数の魔導兵器メーカーの社長令嬢にして常務。それを怒らせてしまった。だというのに雷輝はまるで焦ることなく、むしろこれで仕事に専念できると清々した気持ちだった。

雷輝と彩花の個人的な交際は、三ヶ月前から始まった。向こうからアタックしてきたのだ。彩花は美人でスタイルもいい。父親である社長に溺愛されており、そして半ば実権のない形だけの役職だが、執行役員常務。物は試しにと付き合ってみたのだが……いい加減うんざりだ。

とにかく、彩花などに構っている場合ではない。

今、雷輝が作っているレポートが、満岡商事の未来を決めるかもしれないのだ。それこそ、八嶋魔導重工との関係が切れるくらい何ともないというほどの――。

※

雷輝が徹夜で作った資料に対し、真っ先に攻撃してきたのは田島部長だった。

「マギメタルの自社採掘ね……君に夢想癖があるとは知らなかったよ。退職して扇動家にでもなったらどうかね？」

わざと雷輝のレポートを乱暴に机に投げ、極めて冷ややかな視線を向けてくる。

そのことに雷輝は失望しつつ、しかし同時に、予想どおりの反応だと部長を憐れみ、心の中で笑ってしまった。

まるで大局が見えていないし、見ようともしていない。このままではこの会社が、否、この国が潰れてしまう。

しかし田島は、金属資源本部マギメタル事業部の部長。彼を説得しないことには、雷輝の提案は実行に移されないのだ。

田島とて、かつては第一線で戦ったビジネスマンだったはずだ。二十四歳の雷輝が生まれるより前から会社に貢献し、満岡商事を超大手商社までのし上げた功労者の一人だ。その経歴には雷輝も素直に敬意を払う。

だが今は、定年まで無難に勤め上げることしか頭にない老害だ。

「私も部長の意見に同感です。天堂課長の提案は無謀にすぎます。まるでおとぎ話。まさか、

あのギドラニア神聖帝国と戦争でもするつもりですかね？」

国外営業一課の課長が語った。彼は田島部長の腰巾着の二つ名を持つ男だ。それに追随するように、他の二人の課長も頷いてみせる。

マギメタル事業部は、国外営業の一課と二課。国内営業の一課と二課の四つに分かれている。雷輝は国内営業二課の課長だった。

部長と四人の課長が出席するこの会議で、最も若いのは雷輝であり、同時に最も仕事をしているのも雷輝だろう。

だが、そのことに雷輝はさほど意味を見いだしていなかった。なぜならマギメタルとは鉱物資源であり、それを扱う部署にとって、本来なら開発こそが花形であるはずなのだ。

マギメタルの開発とは、すなわち採掘のこと。

鉱区の所有者やライバル企業と交渉して採掘権を勝ち取り、地質調査を行ない、機材と人材を用意してマギメタルを掘る。

ところが現在、マギメタルの採掘は世界的に、ギドラニア神聖帝国という超大国に支配されていた。他の業種ではなかなか類を見ない、完全な独占状態。

ギドラニア神聖帝国の企業たちは、母国の圧倒的な政治力と軍事力を背景に他国の企業を蹴り落とす。そしてギドラニア神聖帝国の政府がそれを積極的に推奨していた。

なぜならマギメタルとは戦略資源だ。強力な魔導兵器を造るための材料だ。

魔導兵器を所有しない国家など、石の槍や矢を武器にしているのと同じ。

よって他国の侵略や、マガツと呼ばれる化物どもから国を守るには魔導兵器が必須で、その材料たるマギメタルを握る者こそ世界を制する。

ギドラニア神聖帝国が世界で唯一の超大国と呼ばれる由縁がそこだ。

オリハルコン、ミスリル、ヒヒイロカネ、アダマンタイン、アラモント鋼、アンオブタニウム、暗黒水晶――マギメタルには様々な種類があり、それぞれ異なる性能を有するが、その鉱区がギドラニア神聖帝国に牛耳られているのだ。

他の国は、ギドラニア神聖帝国に売ってもらうしか、マギメタルを入手する方法がない。

それは雷輝が所属する満岡商事も例外ではなかった。

つまり、ギドラニア神聖帝国の気分次第で、満岡商事はマギメタルを欲する顧客の要望を満たせなくなるし、それどころか梵珠王国の国防そのものが揺らぐということである。

雷輝は部長に真摯な瞳を向けながら、レポートの内容を改めて説明した。

「地上から飛来するマガツの脅威は年々高まっています。我々は住み処である空を守らねばならない。人間だけじゃない。エルフも獣人もリザードマンも吸血鬼もドワーフも……。当然、マガツと戦うための魔導兵器の生産数は増え、自動的にマギメタルの需要が高まる……このままでは需要が採掘量を追い越すのは時間の問題です。そうなればギドラニア神聖帝国は、マギメタルを売らなくなる。具体的な数字をグラフにしてレポートに書きました。十年以内に需要

と供給が逆転します。これは予測と言うより、確実に訪れる『予定』と断言して差し支えないでしょう。真偽など問題ではなく、どうやって備えるかを議論する段階なのです」

「その君の言う備えというのが『マギメタルの自社採掘』かね？　馬鹿馬鹿しい。君自身がレポートで指摘していることじゃないか。全てのマギメタルはギドラニア神聖帝国によって独占されている。それは彼らが持つ政治力と軍事力のたまものだ。彼らは自分たち以外がマギメタルを採掘するなど絶対に認めない。一体全体どうやって戦う？　ああ無論、我らが偉大な梵珠王国は間違いなく先進国で、この満岡商事はその中でも超一流の商社だ。しかし先進国と呼べる国は他にもある。超大国は一つだけだ。圧倒的に強いから一つだけなのだ。ひねり潰されるだけだろう。現に君は一度、敗北しているじゃないか」

部長は机を指先でトントンと叩きながら、雷輝を侮蔑するように吐き捨てた。

そうだ。田島部長が言うように、雷輝は既に自社採掘にチャレンジし、失敗している。ほんの一年前の話だ。

雷輝は、金属資源本部の長である常務に直談判し、自社採掘の必要性を認めさせた。そして田島部長の反対を押し切ってマギメタル事業部に開発課を起ち上げ、その課長を国内営業第二課の課長と兼任した。普通なら過労死する仕事量だったが、雷輝は超人的な体力で耐えた。

そして、満岡商事に入社する以前の『かつての人脈』を使って神聖帝国の司祭と話を付けた。例外的にお目こぼしを受け、マギメタルを採掘できるはずだった。現に雷輝の開発課は、とあ

る小国の鉱区の採掘権を勝ち取っていた。地質調査も終え、あとは掘るだけだった。

しかし鉱区の埋蔵量が想定よりも多いと分かった途端、その隣の国が進軍してきたのだ。もともと小競り合いが絶えない二国だったが、そのとき相手の国は明らかに神聖帝国の強力な支援を受けていた。

しかし、それでも雷輝には打つ手が残っていた。

神聖帝国が軍事力に訴えてくることは想定の範囲内だった。ゆえに鉱区防衛のため、あらかじめ民間軍事会社（PMC）――すなわち傭兵――と契約を交わしていた。神聖帝国と一戦交えることもいとわない、荒くれ者かつプロの集団だ。

ところが雷輝の意志とは裏腹に、鉱区からの撤退が決まった。部長からのストップではない。その上の取締役会議で決まったことだった。

その後、二つの国は一つに統一され、鉱区の採掘権の話は白紙に戻った。そして鉱区は神聖帝国の企業が採掘することになった。

神聖帝国は、マギメタル独占のためなら一国を地図から消すくらいなんとも思わない連中なのだ。

ここまで露骨にビジネスルールを無視したやり方をされても、誰も神聖帝国に文句を言えない。言ったが最後、様々な屁理屈を並べられ『神への冒瀆者』のレッテルを貼られ、文字通り殺される。

だがそれでも、いやだからこそ自分たちの力でマギメタルを手に入れなければならない。

そんな恐ろしいギドラニア神聖帝国に、命を預けてはならないのだ。

「一年前はあまりにも巨大な埋蔵量ゆえに神聖帝国の関心を買ったのです。次はもっと小規模な、市場に影響を与えないレベルの鉱区を狙います。仮にまた想定外の埋蔵量が確認されても外部への発表はしません。前回はどこからか情報が漏れてしまったようですが……次は情報統制を徹底させます。とにかく重要なのは、我が社がマギメタルの鉱区を持つということ。まずは最初の一つを獲得し、前例を作るのです。そして理想を言えば、仮に神聖帝国からの供給が完全にストップしても、国内需要をまかなえるほどのマギメタル供給力を我が社が保有する……いえ、隠し持つことです」

部長がほんのわずかでも、若かった頃の気持ちに立ち戻ってくれたら……そう希望を込めて、雷輝は味方のいない会議に挑む。

しかし、だ。

「いい加減にしたまえ天堂君！　そもそも、この十年以内にマギメタルが供給不足になるというレポートからして私は疑問だよ！　採掘技術は年々進化しているし、新しい鉱山だって見つかっている。リサイクル技術も研究されている」

「それを踏まえた上でのレポートです」

「それを妄想だと言っているのだよ！　いいかね。ギドラニア神聖帝国はマギメタルを独占し

て販売することで莫大な利益を得ている。販売をやめたら彼らが損をしてしまうだろうが。神聖帝国のことだ。何か手を打っているに違いない。なんにせよ、自社採掘など不可能なのだ」

「それは違いますよ部長。ギドラニア神聖帝国の力の根源は、マギメタルの販売などではありません。真に恐るべきは軍事力です。マギメタルはそれを支えるために必須。マギメタルが不足したら、軍事力を維持するため他国への流出をストップします。そうしなければ、彼らがマガツに滅ぼされますからね。今のところギドラニア神聖帝国は、他国を従えることに快感を覚えていますが、それも自国が無事であることが大前提。どうか私のレポートにもう一度よく目を通してください」

「いいや、議論は終わりだ。これ以上続けると言うなら、会議室から出て行きたまえ」

田島部長からの最後通告だった。それを聞いて雷輝は天井を仰いだ。

敗北感ではない。そんなものは微塵もなかった。あるのは彼らに対する憐れみだった。

そう、彼ら。

田島部長が守勢に回っているのは理解できる。彼は五十代だ。十年以内に定年退職する。雷輝のレポートが現実となっても関係ない。ビジネスマンとしての矜持よりも、彼には守るべき家族があるのだ。無難に退職金をもらい、余生を送りたいのだろう。まるで尊敬できないが、分からなくもない。

しかし、それ以外の課長たち。彼らは十年後もこの会社にいる。まだ若いのだ。どうして守

りに入っている？　部長の言葉に頷くだけのイエスマン。社内政治がそんなに楽しいのか？

このとき雷輝は、自分が『耐えすぎた』と察した。

なぜならこの会議室の空気は、マギメタル事業部だけのものではない。それどころか、他の会社、他の国――ギドラニア神聖帝国以外のあらゆる場所に蔓延している空気なのだ。

誰もが諦めている。

どこに行っても同じだ。

ならば自分で起ち上げるしかないではないか。

「分かりました。お望み通り、出ていきましょう。皆さん、それがお望みのようですから」

「はんっ。帰れと言われて本当に帰るのか。これだから近頃の若い者は。そんなことでは社会で生きていけないぞ」

部長は勝ち誇ったように言った。

雷輝のこれまでの実績を考えれば、全く的外れな言葉だった。

雷輝が二十四歳という若さで課長の地位まで昇ったのは、決してコネでも運でもない。会社に対して、それに相応しい貢献をしてきたからだ。しかし今の部長にとってはどうでもいいことなのだろう。

「あなた方には愛想が尽きました。退職届は後日提出します。今までお世話になりました」

そのとき、ようやく彼らは目を白黒させた。

雷輝は大企業の出世コースを爆進している。そのことだけは誰も否定できない。そんな輝ける未来を、まるでアルバイトをバックレるような気軽さで捨てたのだ。

理解できるはずもない。冗談にしか聞こえない。

だが雷輝の目を見れば、本気だと理解してしまう。だからこそ、なおさら意味不明。

「ふ、ふざけるな！」

「君は我々を愚弄しているのか⁉」

「社会というものを舐めているのかね！」

「元七大勇者だからと言って、図に乗るなよ！」

どれが誰の罵倒なのか分からない。一斉に噴火した。

しかし、その中の一つ。『元七大勇者』という単語が、会議室を支配した。

「ああ、そうだ。天堂君。君はかつて七大勇者の一人だった。ギドラニア神聖帝国の軍人で、その最強と言われる七人の一角だった。思えばこのレポートは、ギドラニア神聖帝国を利するためのものなんじゃないのかね？　間違った思想を蔓延させて、道を誤らせ、ギドラニア神聖帝国が付け込む隙を作る……ああ、そうに違いない！　その手には乗らんぞ！」

田島部長は叫ぶ。

もはや雷輝は、やれやれと肩をすくめるしかない。確かに雷輝がかつて七大勇者だったのは事実だ。ギドラニア神聖帝国の軍人だった。しかし雷輝がそうなってしまった事情も、勇者を

辞めて帰国した理由も、彼らは知っているはずだ。
なにより雷輝が今まで満岡商事に多大な利益をもたらした事実を考えれば、そんな過去などどうでもいいはずなのに。
雷輝は罵声を浴びながら、涼しい顔で会議室を後にした。
「ク、クビだぁっ！」
扉を閉める寸前、そんな部長の声がした。
出世や金銭など最初から眼中にない。大企業への就職は、雷輝にとって手段にすぎなかった。
その手段が間違っていたのなら、今すぐ修正しよう。
雷輝はふと廊下の窓から外を見つめる。
満岡商事の本社ビルは、流石に見晴らしがいい。
頭上には雲一つない青空が広がり、そして遠くに見える大地の切れ目の先には雲海が広がっている。
そう。ここは雲の海に浮かぶ島。
人間だけでなく、エルフも獣人もリザードマンも吸血鬼もドワーフも、その他あらゆる生物が地上を追われ逃げてきた。これを失っては滅亡するしかないのだ。
ゆえに是非もない。
この空をマガツから守るため――。

※

雷輝がオフィスに戻って自分の荷物を整理していると、昨夜のように電話が鳴り、昨夜のように部下が取り次いだ。

「天堂課長。八嶋魔導重工の八嶋彩花様から外線一番にお電話です」

部下は雷輝が辞職を宣言してきたことを知らないのだろう。どうして会議から雷輝だけが一足早く帰ってきたのかと疑問には思っても、まさかバックレたり、クビを言い渡されたりしたなど想像もしないはずだ。そのことをおかしく思いつつ、雷輝は受話器を取る。

「お電話変わりました。天堂です」

「ああ、雷輝？　昨日はごめんなさい。私ったらあなたの事情も考えず……あなたにとって今が一番大切なときですものね。その若さで課長まで昇って、更に更に……私、反省したのよ。だってお父様に怒られたんですもの。あなたの邪魔をしてはいけないって。だから許して」

「ああ、そんなことか。許すも何も、最初から怒っちゃいないよ」

「本当⁉　嬉しいわ。次からはちゃんと雷輝の都合も考えるわ。雷輝の仕事が一段落するまで、私、ずっと待ってるわ」

急にしおらしくなった彩花に、雷輝は笑いを堪えるのが大変だった。

早い話、満岡商事のエリートに媚びを売りたいのだ。なにせ彼女の会社は魔導重工。マギメタルがなければ魔導兵器を造れず、商社がなければマギメタルは手に入らない。

しかし、彼女の心変わりは無駄である。

「じゃあ、今からデートしようか。たった今、会社を辞めることにしたんだ」

「……え？」

「おや、電話が遠いのかな？　満岡商事をね、辞めたんだよ。これからはいくらでも自由な時間を作れる。さあ、どこに行こうか？　今まで寂しい想いをさせてごめんよ」

彼女が望んでいた時間のはずだった。なのに受話器からは沈黙が流れてくる。

しばらくして――。

「そ、そうなのね……今からはちょっと、私も都合が悪いし……」

「そうか、そうだろうね。じゃあ、いつなら都合がいいんだい？　一緒に牛丼でも食べに行こうぜ」

「分からないわ。私、忙しいし……それじゃあね！」

昨夜と同じように電話は切れてしまった。もう二度と彼女から連絡はないだろう。

いや。雷輝がこれから行なおうとしていることが現実になれば、彼女は今まで以上に熱烈に雷輝を求めてくるかもしれない。

だが既に、というか最初から、八嶋彩花など雷輝の眼中にないのだ。

※

会社を定時で飛び出した雷輝は、なじみの店で牛丼を食べたあと、自宅のマンションまでマイカーを走らせる。

渋滞の多い王都の道。通勤に使うのも後任に引き継ぎを終えるまでだ。清々すると同時に、感慨深いものもあった。

そして帰宅しソファーに腰を下ろす。太陽が沈まぬうちに帰るなど、いつ以来だろうか。

もう雷輝には大企業の後ろ盾はない。自分の力で戦わなければならない。しかし雷輝には不安はまるでなかった。むしろ足かせがなくなったとしか感じなかった。

雷輝は棚からウイスキーのボトルとグラスを出す。ストレートで飲み込むと、焼けるような熱さが喉に染みこんだ。するとかえって頭が冴えてきた。これからのことを考える。

富や名声には興味がない。

安定した生活も老後が近づいてから考えればいい。

そもそも、そんなものが欲しいなら、あのまま満岡商事に残っていれば手に入る。

自分ならレールに沿って出世し、十数年後には取締役まで昇る自信があった。

しかし、十数年後では遅すぎる。雷輝は今、羽ばたきたいのだ。

「お兄様、お兄様！」

と、そこに妹のシヅルが帰ってきた。

ティーンエイジャーの少女らしい可憐な服の上に、科学者然とした白衣を羽織るという不思議なファッションだった。

彼女は焦った様子でリビングに飛び込み、ソファーでくつろいでいた雷輝に抱きつく。

「おいおい、何をそんなに慌てているんだ？」

雷輝は優しく呟き、シヅルの小さな体を抱き返した。

本当に小さい。その外見は十歳程度にしか見えなかった。

しかしシヅルの本当の年齢は十五歳だ。かつて神聖帝国で行なわれた実験で、このような姿のまま成長が止まってしまった。本人はさほど悲観していないが、兄としてたまに悲しい思いに駆られる。

「慌てもしますわ、お兄様。彩花さんと何かあったのですか？　あの人が不機嫌なのは珍しくもありませんが、わたくしに当たってくるのはお兄様と喧嘩したときと相場が決まっています。今日は特に酷かったのですよ。わたくしの顔が気にくわないなんて変な言いがかりを付けてきて……彩花さんが常務でなければ殴っていたところです」

「それは済まない。確かに彼女の機嫌が悪いのは俺のせいだ。シヅルに迷惑をかけるつもりはなかったんだ」

「いいえ、いいのです。お兄様は悪くありません。それで結局どうしたのです？　そもそも、お兄様がこんな時間に家にいることが珍しいです。何かあったのであれば、シヅルに言ってくださいませ」

シヅルは心配そうに見上げてくる。

「大したことじゃない。会社を辞めることにしたんだ。そのことを彩花に伝えたんだが、どうやら俺は振られてしまったらしい。仕方がない。ニートの男なんて普通は嫌だろうからな。相手が社長令嬢ならなおさらだ」

雷輝がそう告げると、シヅルは目を丸くし、それから「あらあらあら！」と嬉しそうに声を上げた。

「俺がニートになって彼女に振られたのがそんなに嬉しいのか？　酷い妹だな」

「ええ、そうですよ。だってあの女はお兄様に相応しくありませんし、お兄様は企業に仕えて一生を終えるほどスケールの小さな男ではありませんもの。仕えるより、使う側でしょう。むしろ今までがどうかしていたのです」

「流石に買いかぶりがすぎるぞ。満岡商事での五年間は、いい修行になった。だが潮時なのも確かだ。最初は満岡商事を足がかりに政財界に食い込んで力を付けようと思っていたんだが……それは悠長すぎると分かった。気が早いと思うかい？」

「お兄様の決断が間違っていたことなどありません。お兄様がいなければ、シヅルは十年前に

マガツに殺されていました。わたくしの全てはお兄様のものでございます」

シヅルはうっとりとした熱っぽい視線を向けてくる。それを見て雷輝はため息を吐き、シヅルの髪を撫で上げた。

「慕ってくれるのは嬉しいが、そろそろ兄離れをして欲しいな。お前がそんなだから、俺にまでシスコンの疑いがかかるんだ」

「それは仕方のないことでしょう。お兄様はこんなにも格好いいのですから。もちろん、お兄様よりも素敵な殿方が見つかれば、わたくしも考えなくもありませんが？」

そんな男は絶対にいないとでも言いたげだった。

「無職よりもいい男なんてそこら中にいるさ。それはともかくとして……シヅル、俺にはお前の力が必要だ。付いてきてくれるか？」

「ええ、無論ですとも！　お兄様に必要とされるのが、わたくしにとって至上の喜び。その言葉を聞いただけで体が熱くなってしまいます……なんて罪作り。いけないお兄様」

「酷い言いがかり……とも言い切れないか。せっかく一流メーカーに就職した妹の将来を、台無しにしようとしているんだからな。確かに悪い兄貴だ」

シヅルは幼い外見とは裏腹に、本物の天才だった。もちろん、雷輝とて常人よりは優れているという自負がある。だが、その才能は両親とは別方向に向いていた。一方、シヅルは技術者だった両親の才能を素直に受け継ぎ、何倍にも伸ばしていた。

冗談のような話だが、シヅルは六歳で大学に合格し、その二年後には博士号を取った。そして今は、梵珠王国でも有数の魔導兵器メーカーである八嶋魔導重工の主任。まだ十五歳なのに、シヅルの設計した魔導兵器がいくつも生産ラインに乗り、市場で流通している。

そんな未曾有の才能を、雷輝は独占しようとしている。

なるほど、いけないお兄様だ。

「早速、明日にでも退職届を出しましょう。ああ、これでお兄様と朝から晩まで二人っきりになれるのですね。素敵です」

「こらこら。別に遊ぶために脱サラするんじゃないんだぞ。むしろ、これから大変だぜ。俺は相手がギドラニア神聖帝国だとしても遠慮しない。今までやってきたことがおままごとに思えるような世界だ。リスクもリターンも比べものにならない」

「かつて七大勇者の中でも最強とまで言われた人が何を仰います。そんな場所こそがお兄様の戦場でしょうに。シヅルは何があろうとお兄様に付いていきます。そもそも、そうしなければ空が滅びるのでしょう？　どんな視点から見ても、論ずる必要すらないでしょう」

「ありがとうシヅル。お前が妹で、本当によかった」

「お兄様……なんてもったいないお言葉……わたくしも天堂雷輝の妹で本当に幸せです。ああ、けれども血が繋がっていなければ、お兄様はわたくしを妹としてではなく女として見てくださったのでしょうか。それを考えるととても複雑です。果たしてどちらがよかったのでしょう

か。ねぇ、お兄様。いっそ、血の繋がりがあっても……」
「誰よりも頭がいいくせに馬鹿なことを言うなよ」
雷輝は妹の額にデコピンした。
「いたっ！　酷いですわお兄様……」
「ふざけている場合じゃないぞシヅル。俺とお前には才能と若さはあるが、残念ながら金はない。無論、多少の資産はあるし退職金もそれなりに出るだろうが、世界を相手にするには当然足りない」
「あら、お兄様はいつも『金はさほど重要じゃない』と言っていたではありませんか」
「重要じゃないが、金がないと何もできないのも事実だろ？」
「ええ。ですから、金は目的ではなく手段。何かを成し遂げるために必要なものの一つにすぎない。それすら手に入れることのできないようでは話にならない、と。いつも仰っていました」
「よく覚えているな。ああ、そうだ。ジャンプ台になる金は簡単に集まるさ。だから今は大人しく、引き継ぎ作業をしていようか。立つ鳥跡を濁さず、と言うからな。それに俺とお前が退職したと知ったら、金のほうから近づいてくるかもしれない。なにせ俺らの才能が金になると分かっている奴は結構いるからね」
満岡商事は分かってくれなかったみたいだが、と雷輝は続ける。

そして二週間後、雷輝とシヅルは無事に退職した。

雷輝は部長から散々になじられた。「こんなことで辞めるようでは、どこに行っても通用しないぞ」なんてお決まりのセリフを餞別に頂いた。

シヅルは八嶋魔導重工の社長に泣いて引き留められたらしい。しかし『一身上の都合』で押し通し、社長を捨ててきたと言う。

「可哀想だな。俺の上司と違って、八嶋の社長はシヅルの才能を買っていたんだろう。全く、天才を独占するというのは罪悪感との戦いだな」

「あら、八嶋魔導重工は社員が一人抜けたくらいで傾くほどヤワではありませんよ。お兄様が言うように社長はそれなりにまともですし。もっとも、自分の娘だからという理由で無能を常務にするような身内贔屓を続けるようでは、この先分かりませんけど」

そうして雷輝とシヅルが自宅のリビングでくつろいでいると、電話が鳴り響いた。

おやおや早速か、と雷輝は受話器を取る。

「ミスター・ライキ、お久しぶりです」

その野太い男の声に、雷輝は聞き覚えがあった。

「やあ、少佐。あなたの声を聞くのは何年ぶりでしょうね」

「四年ぶりでしょう。驚きました。満岡商事にかけたら、退職したというんですから。しかし、我々にとってはむしろ都合がいい。是非、直接会って話せませんか？　既に一度、あなたには

国を救ってもらった。そしてこうして再び縋ることが恥だとは分かっています。しかし、あなたしかいないのです。お願いします。電話ではデリケートな話はできませんが、私は大統領のメッセンジャーとしてトルウェノ島から梵珠王国に来たのです」

その電話を聞きながら、雷輝はシヅルにウインクしてみせた。

ほら、金のほうから近づいてきたぞ、と。

どうやら田島部長の「どこに行っても通用しないぞ」というありがたいお説教は、現実では通用しないらしい。

※

トルウェノ。かつて雷輝が商社マンとして取引した国の名前だ。

あの頃の雷輝はまだ入社一年目の平社員。所属もマギメタル事業部ではなく、生活流通本部の食品事業部にいた。『ミサイルからインスタントラーメンまで』と言われる総合商社の、インスタントラーメンに当たる部分だ。

四年前、トルウェノは疫病と飢饉で苦しんでいた。彼らは医薬品と食料を買うため奔走した。しかし、どこの国も、どの企業も相手にしなかった。支払い能力がないと見なされたのだ。

だが雷輝だけは違った。雷輝はトルウェノの肥沃な土地に目を付けた。

そして『トルウェノは十分な金になる』というレポートを上司に叩き付けて承認をもらい、新入社員のくせにプロジェクトを動かした。

まず、医薬品と食料の対価を現金ではなく、トルウェノの土地利用の権利として受け取る。そしてポーションの原料となる薬草を栽培する。そのための機材は満岡商事の金で運び込み、可能な限り地元の人材を使う。雷輝の指示でノウハウが広められ、そしてトルウェノの人々は想定以上に勤勉に働いた。トルウェノの住人は、満岡商事から給料を受け取り、生活が豊かになった。

誰もが幸せになる理想的なビジネスだった。

ところが、新人に毛が生えたような雷輝の成功を、快く思わない者が社内にいた。それに薬草は食品ではない。ポーションの材料ゆえに、化学品本部の管轄だった。

入社して一年目の雷輝は、まだ企業という海の狭苦しさを理解していなかった。会社の利益になるのだから、化学品本部は協力してくれるだろうと素直に思っていた。

しかしトルウェノで採れた薬草を流通させるのに、化学品本部は手を貸してくれなかった。生活流通本部と化学品本部の本部長が犬猿の仲だというのは、そのとき初めて知った。

雷輝は『プロジェクトの承認をもらったのに、話が違うじゃないか』と腹を立てたが、立ち止まっている場合ではなかった。薬草を売らないと、医薬品と食料の代金を回収できない。そこで自分で営業をかけまくって薬草を売りさばいた。

おかげで満岡商事は多額の利益を得た。

だが化学品本部から『縄張りを荒らすな』とクレームが来た。雷輝としては化学品本部がまだ手を出していない企業に売ったのだから、縄張りを荒らしたという意識はなかった。

生活流通本部としても、行動力のありすぎる雷輝を扱う自信がなくなったらしい。おかげで異動になった。それ以来、雷輝はマギメタル事業部に所属してきた。

化学品本部は雷輝が新規開拓した流通ルートをそっくりそのまま受け継ぎ、成績を上げたらしい。もっとも、それも一ヶ月前までの話だ。

当初の契約通り、薬草畑の土地は満岡商事からトルウェノへと返還された。雷輝が持ち込んだ機材の全てをトルウェノに売却するというのも契約通りだ。

これでトルウェノの人々は、下請けとして培ったノウハウを基に、薬草栽培を続けることができる。しかもこれからは雇われ農家ではなく、自分たちで経営していくのだ。リスクもリターンも大きくなる。退職した雷輝と同じだ。

雷輝は今、そんなトルウェノの軍情報部の少佐と、ホテルの一室で二人っきりで顔を合わせていた。

少佐は強面の男だが、その頭部には獣の耳が――それも猫の耳が生えていた。トルウェノは猫耳族の国なのだ。耳の形状と尻尾があること以外は人間とほとんど変わらない外見だが、人間よりも身体能力が高い傾向にある。

「盗聴器はありません。私がチェックしました」
少佐は真面目くさった顔で言う。彼は雷輝の倍は生きている。その歳まで情報部で生きてこられたのは、用心深さゆえなのだろう。
雷輝と少佐は互いに向かい合って座り、グラスを軽くぶつけ合う。
「四年前まで我が国は、ちんけな畜産と農業しかありませんでした。自分たちで食っていくのがやっとでした。当然どこの国も会社も、トルウェノを相手にしてくれなかった。しかし、あなたは違った。あなたは大量の食料と医薬品を送ってくれただけでなく、薬草栽培という産業まで教えてくれた。大統領はあなたの銅像を造って議事堂の前に設置しようと本気で考えているくらいです」
「勘弁してください。自分の銅像が雨風にさらされているところなんて想像もしたくない。それに私は別に慈善事業でトルウェノと取引したんじゃないんです。ちゃんと利益を得ている。礼を言われる筋合いはありません」
「誰が何と言おうと、トルウェノの国民はあなたを尊敬しています。それにしても何故なんです？　あなたは会社に莫大な利益をもたらした。あなたはいつだって勝ち続けてきた。なのにどうして辞めてしまったんです？」
「大した理由じゃありませんよ。別なことをしたくなっただけです」
「しかし、二十四歳で課長にまで出世したんです。あなたなら三十代で取締役になれたかもし

れない」
「そんなに待てませんよ。私はこらえ性のない今どきの若者ですからね」
「……辞めてどうするつもりです？　まさかこのまま引退するつもりじゃないでしょうね」
少佐は本気で心配した顔になっていた。
「引退して牛丼屋を始めるのも悪くないと思っています」
「ぎゅうどんや……？」
「しかし、まだ早い。牛丼屋のオーナーに収まるのはジジイになってからでもできます。世界を相手に喧嘩するのは、若い今しかできません」
「それを聞けて嬉しい。あなたはどんな分野でも超一流になれる人間です。我々もあなたを見習って、少し冒険しようと思っているんです。薬草栽培だけでなく、それをポーションに加工する施設も造ろうって計画を検討している最中です」
「へえ、そりゃ凄い！　しかし残念ですね。今の私は商社マンじゃないので。もう少し早くこの話を持ってきてくれたら、少しは手伝えたのに……」
「いや、今日あなたに会いに来たのは別件です。ポーション製造の計画は、まだ先のことですから。今はもっと……差し迫った問題があります。商社マンではなく、元勇者としてのあなたの力を借りたい」
少佐の言葉を聞き、雷輝はニヤリと笑った。

「ズバリ。少佐の用件は、マガツの苗床のことですね？」
雷輝がそう語ると、少佐は少し驚いた顔をしてから、ゆっくりと頷いた。
「よく分かりましたね。流石は満岡商事の若きエースだった男です」
「なぁに。こんなの新聞を真面目に読んでいれば分かることですよ。もっとも、扱いが小さいので気をつけていないと見逃すところでしたが」
「トルウェノはいまだ弱小国ですからね。そのニュースに話題性がないのも無理ありません。ですが、トルウェノに住む我々にとっては文字通り死活問題です」
「私に苗床を倒せと？」
「あなたは本当に核心を突いてきますね。ええ、そういうことです。あなたがとっくに勇者を引退したのは知っています。ですが今、我々が求めているのはビジネスマンのあなたではなく、元勇者の戦闘力なのです。あなたの力は、トルウェノの全軍を遥かに凌駕する」
「買いかぶりすぎです。現役時代ならともかくね。私はマガツとの戦闘で負傷し引退しました。あのときの力はもう出せませんよ。『護天宝器』も神聖帝国に返してしまいましたしね」
「負傷しようが素手だろうが、勇者というのは常人を凌駕する。だからこそ七大勇者はギドラニア神聖帝国の最高戦力として英雄視されているのです。無論、神聖帝国は勇者の力を過剰にアピールしている。これは常識です。ですがミスター・ライキ。あなただけは別だ。あなたの力は荒唐無稽すぎて、むしろ神聖帝国が遠慮した報道をしていた……これも諜報に携わる者

なら常識ですよ」

「ああ、それこそ買いかぶりです。確かに勇者というのは神聖帝国の切り札です。個人で戦局を左右するという常識外れの力を持ち、戦術兵器じみた運用をされました。自分がその七人の一人だったというのは誇りに思っています。しかし、私の力が突出していたという事実はありませんよ。むしろ末席だったと思っています」

雷輝がそう語ると、少佐は首を振った。

「謙遜はよしてください。とにかく我々トルウェノは、あなたに苗床型マガツの討伐を依頼したい。報酬は一億ラエル。どうです？」

ラエルというのはギドラニア神聖帝国の通貨だ。国際取引は全てラエルで決算される。それ以外の通貨は、その国でしか通用しない。

「いや、待ってください。さっきも言いましたが、私は新聞で得た程度の知識しかないのです。トルウェノが今、どういう状況なのか教えていただけませんか？　そもそも苗床のような大型マガツが現れたら、神聖帝国が嬉々として倒しに来るのが普通でしょう」

「……ミスター・ライキ。あなたが一番よく知っているはずです。ギドラニア神聖帝国は、金を払った者しか助けない」

少佐の絞り出すような言葉を、雷輝は無言で肯定した。

マガツ。人間を含むあらゆる生命体の敵、マガツ。

五百年以上も昔、ある日突然この星に現れ、地上を蹂躙した怪物、マガツ。
おかげで人間もエルフも獣人もリザードマンも吸血鬼もドワーフも、誰も彼もが空に逃げるしかなかった。
こうして雲海に浮かぶ島々だけが、辛うじて残った生活領域。
だが空まで逃げても、マガツは追ってくる。極稀に、神々が構築してくれた結界である雲海を貫いて、空まで辿り着くマガツがいるのだ。
皆が力を合わせてマガツを迎撃してきたが、それでもマガツは空の島に住み着いて、繁殖してしまった。
マガツは強い。怪物だ。他の生物を見た瞬間、問答無用で襲いかかってくる。
そんなマガツに未だ人間たちが滅ぼされていないのは、ギドラニア神聖帝国の活躍があったからだ。
まだ生物が空ではなく地上に住んでいた頃から超大国として君臨してきたギドラニア神聖帝国は、その圧倒的な軍事力で教化国を守っている。
教化国――それは敬虔な信者が多数いる国だと神聖帝国が認めた国のことだ。端的に言えば、神聖帝国に多額の寄付金を払っている国のことだ。
小額の寄付金しか払えない国は、準教化国。神々への反逆国として認定されることはないが、しかしマガツの脅威にさらされても、神聖帝国は守ってくれない。

ギドラニア神聖帝国はそうやって複数の国から寄付金を集め繁栄してきた。唯一絶対の圧倒的な軍事力を有しているからできる芸当だ。

「トルウェノに苗床型マガツが飛来したのは一ヶ月ほど前のことです。もちろんトルウェノの正規軍も、地元のハンターたちも苗床を駆除しようとしました。ですが返り討ちにあいました。大型のマガツがあれほど強いとは思っていなかったのです。認識が甘かったと言うしかありません。そしてすぐにギドラニア神聖帝国からの打診がありました。寄付金を増額すれば、苗床をすぐにでも倒してやると。しかし彼らが求める金額は、とてもじゃありませんが払えません。ミスター・ライキ。あなたのおかげでトルウェノの国民は飢えから脱出できた。ですが、それだけです。飢えないことと裕福だということの間には、天地ほどの差があるでしょう」

「ええ、全くです。しかし、それは神聖帝国も承知でしょう？　払えないと分かっている寄付金だけを要求してきたのですか？」

「いいえ、違います。彼らは別の条件も提案してきました。土地を寄こせ、さすれば苗床を倒してやる、と」

雷輝は黙って少佐の言葉を聞いた。

ギドラニア神聖帝国は、トルウェノの国土の一部を神聖帝国の管理下に入れるなら、寄付金なしで教化国にしてもよいと条件を出してきたという。

その国土の一部とは、薬草の栽培地、ポーション工場の建設予定地、飛行場、港、広大な森、

山岳地帯……全て合わせるとトルウェノの八割にもなる。これでは教化国というより属国である。とても独立国とはいえない。

だからトルウェノは雷輝に助けを求めてきたのだ。雷輝ならば、単騎で苗床を倒すことくらい造作もないとトルウェノは信じている。

その報酬、一億ラエル。

これが一人のハンターの報酬と考えれば信じがたい高額だが、勇者を動かすには桁が足りない。勇者というのは戦術兵器なのだ。その価値は最新型ゴーレム百体に優る。とはいえ、トルウェノはこれ以上出せないだろう。雷輝としては一億で助けてやってもいいが、苗床を倒して金をもらうというのはビジネスマンのすることではない。

だから追加の条件を出すことにした。

「……トルウェノ全域での地質調査の許可と、もし資源が見つかった場合、その採掘権を私にください」

「鉱区？　我が国には鉱物資源なんて……」

少佐は表情を崩さなかった。しかし声色にわずかな動揺が見えた。

雷輝は少佐をリラックスさせるために笑った。

「とぼけてもらっちゃ困ります。神聖帝国が何もない国の土地を欲しがるものですか。何か出たんでしょう？　いや、答えなくて結構。権利だけください。こっちで勝手に掘りますから」

「……あなたには敵わないな。ああ、出ましたよ。マギメタル。それもオリハルコン」
少佐のやけくそ気味な声を聞き、雷輝はつい口笛を吹いた。
オリハルコンはマギメタルの中でも最強クラスの強度を持つ物質。魔導兵器の外殻としてはこれ以上に適した素材はない。世界的に産出量が少なく、ゆえにオリハルコンは極一部の魔導兵器にしか使用されない。
「オリハルコンが見つかったのは本当に偶然だったんだです。大雨で土砂崩れが起きて、それでハンターが露出したオリハルコンの欠片を持ち帰ってきました。神聖帝国が採掘権のオファーを出してきたのはすぐでした。連中、私たちの国を穴だらけにするっていうのに、売上の3%しかロイヤリティを払わないって言うんですよ」
それが神聖帝国のやり口だ。
産出国には雀の涙ほどの金を渡して、後は全て自分たちのものにしてしまう。しかも鉱区の作業員は神聖帝国から連れてくるから、現地の雇用にも繋がらない。
「だから断りましたよ。神聖帝国に逆らうのは怖いですが、こっちは独立国です。せめて10%はロイヤリティをもらわないと国民だって納得しません。ですが交渉を始める前に、苗床が現れたんです。信じがたいバッドタイミングですよ」
そして神聖帝国は苗床を倒してやるから、土地を寄こせと言っているわけだ。
そうなれば3%どころか0%だ。

「私に採掘させてくれるなら15％払います。作業員も可能な限り現地の人を雇いましょう」
雷輝は頭の中で素早く計算しながら、自分の条件を提示する。
「15％……！　素晴らしい。しかし私の一存では……」
少佐は雷輝の条件に食いつくが、しかしこの場で決める権限を持っていない。そんなことは最初から分かっていたことだ。
「分かっています。トルウェノへ直接行って、大統領と交渉します。私を連れて行くことがあなたの任務でしょう？　相手がギドラニア神聖帝国だろうがマガツだろうが、私は徹底的にやりますよ。そのために退職したんです。ナイスタイミングですよ。必ずトルウェノを救います。安心してください。あなたは私との交渉を成功させた」

※

トルウェノは南国だった。島々が雲海に浮かんだ今も、赤道に近い場所ほど暑いというのは不変なのだ。
かつて全ての島々は、雲海ではなく、水の海に浮かんでいたという。そして海の上を巨大な船が走り、人も物資も大量に運んでいた。
今はそう簡単にはいかない。

普通、物体は雲に浮かばないのだ。にもかかわらず島がこうして浮いていられるのは、神々の加護のお陰だった。

だから雲に浮かぶ船を造るには、魔導技術を用いて、神々の加護と同じものを再現しなくてはならない。

もちろん島と船では規模が違うが、そんな小規模のものでも、実にコストがかかるのだ。飛行機のほうが遥かに安い。ところが飛行機で運べる物資の量などたかが知れている。

このことが技術の発展にブレーキをかけていた。むしろ五百年前より後退している。

今から約五百年前、地上にマガツが現れたとき、神々はその体を神威結晶へと変え、地中に潜り、島を飛び立たせた。更に空と地上の間を雲海で覆い尽くした。雲海は島を空に浮かばせるための力場であり、そしてマガツを封じる『結界』でもある。

かつては神々の声を直接聞くこともできたらしいが、神威結晶になった今、それは叶わない。神々のお陰で五百年も生き長らえてこられたのは確かだから、感謝は誰もがしている。熱心に教会へお祈りに行っている者もいる。しかし神託が聞こえていた時代と比べると、信仰心に陰りが見えるのも仕方ないだろう。

神々によって建国され、神々によって統治されていると謳っているギドラニア神聖帝国にとって、信仰心の欠如は死活問題だった。地上にいた頃から神聖帝国は超大国で、かつ信仰の中心地だった。実際に神々が多数住んでいて、大神殿があちこちにあった。神々によって統治

されているというのも、あながち嘘ではなかったのだ。
だが今は違う。神々の声はもう聞こえない。だから神聖帝国は、信仰心ではなく軍事力で寄付金を集めているのだ。
マガツから守ってやるから、金を寄こせ、と。
実にビジネスライク。もっとも神聖帝国は本当に強く、実際に金を払えば守ってくれる。良くも悪くも、神聖帝国がいなければ空は滅びてしまう。
そしてこのトルウェノのように金を払えない国が割を食う。
雷輝はシヅルを連れて飛行場から外に出る。四年ぶりのトルウェノだった。
飛行場は相変わらず短い滑走路が一本と、ほとんど小屋のような建物があるだけだったが、昔より明るくなったような気がした。待合室にゴミが落ちているということもない。スタッフに笑顔があった。
そして飛行場の外にはヤシの木が植えられ、ささやかだが訪れる人々を楽しませようという気配りを感じた。それだけで、あの飢饉と疫病に苦しんでいた頃とは別の国になったのだと分かる。
「これがトルウェノの首都、なのですか？」
シヅルがキョロキョロと視線を巡らせた。無理もない。彼女は梵珠王国とギドラニア神聖帝国しか知らないのだ。シヅルにとって国の首都とは、高層ビルが建ち並ぶ摩天楼を指す。だが

ビルなど地平線の果てまで探しても見つからない。

見えるのは、ひたすら広がる青々とした薬草畑だ。腰の高さ程まで成長した薬草は、汁を搾(しぼ)って傷口に塗るだけでも薬になる。工場で精製すれば、肉まで達するような傷でも一瞬で治すポーションになる。

「首都さ。とはいえ、もちろんここは中心部じゃない。ちゃんと市街地だってある。ホテルやレストランだってそろってる。残念ながら牛丼屋はないけどな……」

「お兄様の牛丼好きには困ったものです」

その市街地まで、少佐が車で送ってくれることになっていた。その車は飛行場の目の前に停めてあり、少佐が軍人らしく姿勢のよい立ち姿で雷輝たちを待っていた。

「ミスター・ライキ、本当に来てくださったんですね……そしてミス・シヅル。あなたの実績も聞き及んでいます。これでトルウェノは救われるでしょう」

少佐は熱っぽい声で言う。

雷輝たちはまだ何もしていないのに、少佐は気が早すぎる。しかし、それだけこの国が追い詰められている証明でもある。

雷輝とシヅルは少佐の運転で市街地へ向かった。四年前より道路も車もまともになっていた。前は背骨が折れるかと思うくらい乗り心地が悪かったのに、今はのんびり景色を眺める余裕があった。

「大統領はお二人を待ちわびていました。今この瞬間も、苗床はマガツを産み続けています。今のところ地元のハンターたちの活躍で市街地に大きな被害は出ていませんが……発生源である苗床を叩かねば、崩壊するのも時間の問題です」
「でしょうね。苗床が一匹現れただけで、それまで平和だった国が無人の荒野になったという例すらあります」
　一口にマガツと言っても、そのサイズも形状も様々だ。中でも最もやっかいだと言われているのが苗床型。これは名称通り、マガツを産むことに特化した種類で、あらゆるマガツと交配し、子供を産むことができる。交配してから出産するまでの期間が短く、しかも一度に何十匹も産む。
「少佐、ご安心を。お兄様が引き受けた以上、苗床が死ぬのは時間の問題です」
　シヅルの言葉に少佐は明るく応じた。
「ええ、そう信じています。あなたの兄は、世界最強の男ですからね」
「あまり俺にばかり頼られてもな……しかしシヅルの言うとおりです。倒しますよ。仕事ですからね」
「ありがとうございます。あなたの力なら、もっと好条件の仕事もあるでしょうに……それでも来てくれた。それだけで私は感動しています。あなたほど強くて優しい男を私は知らない」
「勘違いしないでください。俺はオリハルコンの採掘権に魅力を感じたから来たんです。ビジ

ネスですよ」
「まあ、お兄様ったらそんなことを言って。照れ屋さんなんですから」
「はは、ミスター・ライキは本物の自信に満ちあふれているんです。だから、あえて自分を大きく見せることをしないんです」
シヅルと少佐が二人して褒めてきた。雷輝は、やれやれと肩をすくめる。
その瞬間、サイレンが聞こえた。同時にカーラジオから避難警報が流れる。
「……お聞きのとおりです。市街地にマガツの群れが向かっています。ラジオは逃げろと言っていますが、申し訳ありません。この車はこのまま大統領官邸に行きます」
「軍人が逃げるわけには行きませんからね。しかし私はここで降りますよ。自分の脚で走ったほうが速いですからね」
雷輝がそう言うと、バックミラーに映る少佐の顔が、驚きに染まった。
「戦ってくださるんですね⁉」
「まあ、正式な契約前ですが、準備運動がてらに」
車は薬草畑に囲まれた道で止まる。降りた雷輝は「シヅルを頼みます」と少佐に呼び掛けた。
「命に代えてもお守りします。ところで、マガツが来るポイントは分かりますか？」
「ラジオの報道で分かりましたよ。この国に来るのは初めてではありませんから」
「そうでしたね。ミスター・ライキ。この国を頼みます」

少佐はハンドルを握ったまま頭を下げた。
「お兄様。お一人でいかれるのですか？　わたくしを使わなくても大丈夫ですか？」
「シヅルはまだ未調整だろう。そのまま少佐と行け。なぁに、素手で十分だよ」
それは兄妹の会話としては意味不明なものだろう。
シヅルは、まるで自分が道具であるかのように語り、雷輝はそれを当然のように受け流す。
現に少佐は不思議そうな顔をしたが、今は説明しているときではない。
雷輝はマガツの群れがいる方角を向き、足の裏に魔力をためた。
そして一気に放出する。
自動車など遥かに凌駕する加速は、常人なら内臓が潰れて絶命していただろう。いや、魔力の扱いに慣れたハンターでも気絶する。
だが、雷輝にとっては序の口だった。

※

首都と言っても、一番高いビルでさえ五階建て程度。シヅルに言われるまでもなく、決して都会とはいえない。
そもそもトルウェノ全体の人口が十万人を下回るのだから、島全体を合わせても、先進国の

町一つに劣る。

しかし人口が少なかろうと、経済規模が小さかろうと、ここで生活している人々がいる。

そして市街地から二キロメートレほど離れた場所。マガツの群れが黒い塊となって疾走していた。その数は正確には分からない。だが千は下らないだろう。一つ一つはせいぜい馬程度の大きさだが、これほどの数となれば町にとっては脅威だ。

それを迎え撃つため、ハンターが防衛線を構築している。

ハンターとは、マガツを狩ることによって生計を立てている職業だ。

マガツが数多く生息している場所ほど、実力のあるハンターが集まってくる。

だがトルウェノはもともとマガツが少ない場所だった。ゆえにハンターの数は、首都以外の者を含めても五百人ほど。練度もさほど高くない。

自由業であるハンターの他に、トルウェノの正規軍というものもある。しかし規模が小さい。苗床が出現したときに崩壊し、もはや戦力としては機能していないと少佐が言っていた。よってハンターたちが最後の盾だった。

雷輝はマガツの群れとハンターたちの戦いを、上空から見下ろしていた。別に飛行魔術を使っているのではない。たんに思いっきりジャンプしただけだ。現在、戦場のど真ん中めがけて落下中。誰も雷輝に気付いていない。だが雷輝からは全体がよく見えていた。

どうやらこの国のハンターには、槍型の魔導兵器が普及しているようだ。魔導兵器とは魔力

で駆動する兵器の総称だ。そのサイズは個人で使うようなものから、雲海に浮かべる巨大戦艦まで様々。

槍型のものは敵と距離を保ったまま戦えるので人気が高い。

しかし雷輝が見つめる先には、両手に剣を握って戦う、青い髪の少女が一人いた。

彼女の実力は、他のハンターとは明らかに隔絶していた。一人で二十人分はマガツを切り裂いていた。二本の剣を舞うようにして振り、竜巻の如くマガツの群れを屠っている。

どうやら彼女の剣型の魔導兵器には、風の属性がエンチャントされているらしい。刃が触れるより一瞬速くマガツが両断させていく。更に剣を振るのに合わせて不可視の斬撃が飛び、遠距離のマガツを数体まとめて屠り去る。

少女は内包している魔力も剣技も達人の域。雷輝ですら「ほう……」と感嘆の声を漏らすほどの戦力だ。

だが、無敵ではない。一人で突出しすぎている。双剣で四方八方の敵を倒しても、マガツは雪崩の如く次から次へと少女に襲いかかった。

そして少女の快進撃は破綻する。熊に似た形状のマガツが、彼女の背後から爪で斬りかかった。それに反応しきれなかったのだ。振り返って目で捉えても、刃が追いつかない。爪は彼女の肉を抉る――直前に雷輝の拳がそのマガツを粉砕した。

「え……」

青い髪の少女は雷輝に命を救われた形だが、感謝よりも困惑が優ったらしい。

なにせ空からいきなりスーツ姿の男が降ってきて、素手でマガツを倒したのだ。それも、ただ倒したのではない。拳が触れた瞬間、マガツ自身の魔力に干渉し、暴走させ、自爆させたのだ。少女にはそんな過程を理解できなかっただろうが、目の前でマガツが木っ端微塵になったのだけは見ている。

マガツは肉も骨も血も残さず、本当に粉々になった。こんな田舎の島のハンターには、想像もできない技かもしれない。しかし元勇者の雷輝なら、鼻歌交じりに実現してしまう。

「やあ、空から失礼。驚かせたのは謝るが、油断するなよ。また来たぜ」

「っ！」

まだまだ敵は沢山いる。そして雷輝と少女は孤立して、周りをマガツに囲まれている。

狼の形をしたマガツ。巨大なサソリのようなマガツ。大蛇にムカデ。名状しがたいもの

――どれもが殺意を振りまき、そして目視可能な黒いオーラをまとっている。このオーラこそマガツの証であり、あれに触れると弱い生物はそれだけで死んでしまう。

雷輝の言葉で油断から脱した少女は、迫り来る三匹のマガツの首を剣の一振りで切断。もう一本の剣で更に三匹。合計六匹を瞬く間に倒した。

「こりゃ凄い。勇者はともかく、神聖帝国軍に入れば騎士くらいにはなれるかもしれない……さて、俺も負けていられないな」

雷輝は呟き、手刀を振る。目の前のマガツを脳天から股にかけて一刀両断。それで終わらず、雷輝の腕から放たれた魔力の塊が直進し、一気に十匹を斬殺せしめる。

そのとき雷輝は次の動作に入っていた。常人では視認すらできない速度で駆け、腕の一振りでダース単位の敵を斬る。

青い髪の少女も十分に強いが、雷輝は次元が違った。当たり前だ。だからこそ大統領に呼ばれてここに来たのだ。

そして戦闘は、雷輝の参戦を境に一気に収束へと向かう。ほどなくしてマガツは一匹残らず死に絶えた。

「やれやれ。素手とは言え、この程度のマガツに三分もかかったか。腕が鈍ったな」

雷輝はスーツの着崩れを直してから、腕時計を見て呟く。

と、そこに青い髪の少女が近づいてきた。こうしてじっくり見ると、かなりの美少女だと分かる。年齢は十五歳くらいだろう。スタイルもいい。そんな彼女は未だ困惑を浮かべ、猫耳もピクピクと警戒するように震えている。そして恐る恐るという感じで声を絞り出す。

「あなた……あなたはもしかして……元勇者の……!?」

そう語る少女は、頬を紅潮させていた。スカートから伸びる尻尾が、パタパタと揺れている。

どうやら、元勇者という肩書きに、思い入れがあるらしい。

「名乗るほどの者じゃない。通りすがりのニートさ。本当だよ。最近、脱サラしたんだ。それ

じゃ、俺は行くところがあるから」
雷輝は再び足裏から魔力を放出して加速。少女が次の台詞を言う前に、音より速く離脱した。

※

マガツを片付けた雷輝は、その足で大統領官邸に向かった。
音より速く走れる雷輝だが、町中でそんなことをすると窓ガラスが片っ端から砕け散って、とても迷惑だ。
別に嫌われたくてトルウェノまで来たわけではないし、特に急ぐ必要もないので市街地ではまっとうに歩く。
大統領官邸の前に行くと、丁度、少佐の運転する車が到着したところだった。
降りてきたシゾルは笑みを浮かべる。
「お疲れ様です、お兄様。汗をかいた姿も素敵ですよ」
「たかだか千やそこらの雑魚マガツを倒しただけで汗をかくとは情けないよ。この仕事が終わったら、鍛え直す必要がありそうだ」
すると少佐がギョッとした顔になる。
「え、もう終わらせてきたんですか!?」

「当然でしょう少佐。こうしてお兄様がここにいるということは、そういうことなのです。勇者がどういうものなのか、いまいち理解していないようですね」
「……いえ。分かっていたつもりなのですが……書類上で勇者の戦果を見るのと、実際に体感するのでは違うものですね」
「そんな大したものじゃありません。俺はただ、人より魔力が多くて、その制御が少しばかり得意というだけです。そんなものより、ビジネスマンとして評価してくれるほうがよほど嬉しいですね」
「あなたはどちらも超一流ですよ。ではミスター・ライキ。ミス・シヅル。大統領がお待ちです」
そして案内された執務室に入ると、大統領が難しい顔をしていた。だが雷輝の顔を見た瞬間、明るい笑顔になる。そして立ち上がって、机越しに手を差し出してきた。
雷輝も手を伸ばし、四年ぶりの握手を交わす。相変わらず固いグリップだった。
「ああ、ライキ！　よく来てくれた。君が帰ってくる日を夢にまで見たよ。町にマガツが迫っていたようだが、どうなった？」
「交渉の邪魔になるかと思い、散歩がてらに殲滅してきました」
「ははは！　それでこそライキだ！　ところで、そちらにいる可愛らしいお嬢さんが君の妹かね？　噂は聞いているよ。兄妹揃って天才だ」
「シヅル・テンドウです。四年前は兄がお世話になりました」

大統領はシヅルとも握手する。

「世話になったのはこっちだよ。この国がまだこうして残っているのは、君の兄のお陰なのさ。まあ、改めて語るまでもないだろう。しかし礼だけは言わせてくれ。ライキ、君のお陰でトルウェノは発展した。皆が笑顔を取り戻した。それだけでなく生活に余裕というものができた。四年前、この国は餓死寸前の人々であふれかえっていた。子供たちまでが物乞いをしていても、私にはどうすることもできなかった。しかし今は違う。人々の目には生気があふれている。未来への希望があるんだ。それを成したのはライキ、君だ。本当に感謝している」

「私はきっかけを作っただけです。そのきっかけをものにしたのはトルウェノの国民です。おかげで満岡商事は利益を上げた。対等なビジネスです。礼には及びません」

「そのクールな態度も相変わらずだね。しかし、誰よりも熱いハートを持っている。その証拠に君は来てくれた」

「大統領はおだてるのが上手ですね。そのうち、私の一挙手一投足に意味を見いだしかねない。ですが、私はビジネスに来たんです。その話をしましょうか」

雷輝とシヅルは大統領に勧められソファーに座る。

四年前と同じく、少し固かった。大統領の部屋に置くには相応しくない。きっと自分の身の回りの物を後回しにしているのだろう。

「雷輝、すでに伝えたとおりだ。この国にはマガツの苗床がいる。神聖帝国はそれを倒して欲

しければ属国になれと言っている。私は大統領としてそんな条件は飲めないし、国民だって納得しない。だが手をこまねいていては国が滅びる。だから君たちに来てもらった。報酬はまず一億ラエル。この国のハンターギルドで苗床にかけた懸賞金と同じだ。それからこの国の全域における採掘権を与える。トルウェノの取り分は、採掘された資源の売上の15％。期限は五年で、それが過ぎたら改めて交渉する。この条件でいいかな？」

「はい、細部は後で詰めるとして、その条件で異存ありません」

雷輝は頷く。

「オーケー、まずは仮契約だ。今日中に予備的合意書（レター・オブ・インテント）を作る。だからできるだけ早く苗床を倒してくれ。あとで苗床の資料も渡す……もっとも、最初に一戦交えて敗北して以来、データを取れていないのだが……」

予備的合意書（レター・オブ・インテント）とは、本契約前に交わす文書だ。

大きなプロジェクトの場合、全てを決めるまで時間がかかる。だからその前に、基本的な部分で互いが合意していることを示す文書を作り、社内や関係各所への説明や決議に使う。契約書と同じように法的拘束力を持たせることも可能だ。

「分かりました。とりあえず、明日にでも苗床を目視で確認してみましょう」

「助かる。ハンターだけではあと何週間持ちこたえられるか分からないし、神聖帝国がこの島の近くに艦隊を待機させているんだ。我々が条件を飲んだらすぐにでも苗床を倒すつもりと言

いたいんだろうが、それ以上に威圧が目的だよ。実に腹が立つ」
「気にしなければいいんですよ。それより、この国のハンターギルドは国営でしたよね？　苗床の懸賞金、今すぐ撤回してください。どうせ俺以外には倒せないんです。今更、苗床に挑むハンターもいないでしょうが、犠牲者は増やしたくありません。ついでに苗床付近への立ち入り禁止措置も」
「そうだな。もっと早くそうするべきだった。済まない、ギルドのことまで頭が回らなかった」
「お忙しいのですから仕方ありません。ところで大統領。苗床が来る前、何か妙なことがありませんでしたか？　たとえば、電波が乱れるとか」
「電波？　この国にもＦＭラジオくらいはあるが……そういった話は聞いていないな」
大統領はどうしてそんな質問をされているのか分からないという顔をする。
しかし、ＦＭラジオの周波数で反応がないのは最初からシヅルが予想していた。
「長距離用の短波通信装置もありますよね？　そちらは？」
今まで黙っていたシヅルが口を開く。大統領は子供の姿のシヅルの質問にも真面目に答えてくれた。
「私のところには報告されていない。調べたほうがいいのかな？」
「ええ。お願いします」
シヅルのお願いは子供のお願いではない。なぜなら彼女は八歳で博士号を取った天才なのだ。

大統領もそのことを分かっているから、真剣な顔で頷いた。

※

大統領の執務室を出たあと、雷輝とシヅルは別室で少佐を質問攻めにした。更に、自分たちの足で町の様子を観察する。そうして得た情報を、喫茶店でまとめた。

まず、ハンター相手に商売をしようと様々な者がこの国に集まっているが、もっとも儲けているのは、昔からここで商売をしているロレンス商会だ。その名前は雷輝も知っていた。

ロレンス商会は多額の広告費を使っており、知名度は抜群。ロレンス商会が扱っている魔導兵器は、この国にもともと生息していたマガツ程度なら問題なく倒せる品質で、しかも安価だったことから人気を博していた。

ロレンス商会の最大の広告塔は、専属契約している青い髪の美少女ハンター。先程、雷輝と一緒に首都を守って戦ったハンターのことだ。

名前は、セフィア・アルテナ。

セフィアは可愛い上に凄腕で、ロレンス商会の魔導兵器を使ってマガツを倒しまくっている。それがロレンス商会の価値を品質以上に高めているのだ。

しかし、苗床によってマガツが急激に増殖している今では、ロレンス商会の魔導兵器ではど

う考えても火力不足だ。
　さっき雷輝はロレンス商会の武器屋に行って、売られている魔導兵器を実際に確認してみた。セフィアが使っていた双剣より、明らかに劣っていた。おそらくセフィアには特別なモデルを使わせているのだろう。
　雷輝は苗床を倒すつもりだが、しかし苗床を倒してもそれが産んだマガツまで消えるわけではない。この国のハンターが自分たちで倒さねばならない。ゆえに、もっと高品質の魔導兵器を流通させる必要がある。
「ですが、それにはまず、この国のハンターの意識を変える必要がありますよ」
　シヅルがショートケーキにフォークを刺しながら指摘する。
「そう難しい話じゃない。たんにロレンス商会以外の魔導兵器を知らないから他のを買わないだけだ。かつてのようにマガツの数が少なかった頃ならともかく、今はハンターだって自分たちの武器が二流だって気が付いているだろう。もっとも、セフィア・アルテナは味方につけたいがな」
　するとシヅルはムスッとした顔を向けてきた。
「それは彼女が美少女だからですか？　どうせ胸の大きな人だったんでしょうね。八嶋彩花もそうでした。お兄様は胸が大きい人が好きですからね」
「変な対抗意識を燃やすなよ。確かにセフィアは美少女だったし、スタイルもよかったが、シ

ヅルのほうが可愛いよ」

そう言うと、シヅルはすぐに穏やかな顔になる。

「ふふ、そうでしょうね。冗談です。ちょっとお兄様を困らせてみたかっただけですよ。シヅルは見た目と違って大人ですからね」

※

セフィアはロレンス商会の社長の自宅で、鞭で打たれていた。

別に比喩ではない。床に土下座した姿勢で、激しく何度も背中を打たれていた。

「あぐっ……お願いします……もう許してください……許してください！」

そう懇願しても社長はムチを振り回すのをやめなかった。渾身の力でセフィアの背中を打つ。その度にセフィアから悲鳴が漏れ、白い肌に酷い傷が増えていく。

マガツとの乱戦を終え、ただでさえ疲労しているセフィアにとって、この仕打ちは耐えがたかった。しかし社長はセフィアの言葉など聞いていないので、折檻が終わるのをジッと待つしかない。

なぜこんな拷問のようなことをされているのか。

話は単純。先程の戦闘で、セフィアのマガツ討伐数がトップではなかったからだ。

「この無能が！　誰がお前らの母親の治療費を払っていると思っている！　お前ら程度の稼ぎで、神聖帝国の病院に入院させられるか⁉　全て吾輩のお陰なのだぞ！」

「ありがとうございます……ありがとうございます……！」

鞭で打たれながらも、セフィアは悲鳴を堪え、逆に感謝の言葉を口にした。そうでもしないと、革の鞭が鉄の鞭になるのだ。

「ふん。口先だけなら何とでも言える。お前の言葉には一ラエルの価値もない。吾輩に感謝しているというのなら、一匹でも多くのマガツを倒して、ロレンス商会の魔導兵器を宣伝するのだ」

社長はそう言って、加えていた葉巻の火をセフィアの背中に押しつけた。丁度、鞭で打たれた傷が重なっていた場所だった。セフィアはたまらず気絶する。しかし横腹を蹴られてすぐに意識を取り戻した。

「我輩の部屋で寝るとは何事だ！　さっさとマガツ狩りに行ってこい！　それと、兄貴に二十本追加だと伝えておけ。分かったか」

「……分かりました……伝えておきます。愚かな私に教育してくださり、ありがとうございました……」

セフィアは上着を着てから、社長に深々と頭を下げる。背中の傷と布が擦れるだけで泣きそうなほど痛い。それ以上に心が痛い。だが社長には逆らえない。

セフィアの母親の病気を治すには、ギドラニア神聖帝国の進んだ医療が必要なのだ。その治

療費は社長が払っている。どんな仕打ちを受けようと、母親の命には代えられないのだ。

※

社長はセフィアがいなくなったあとも、まだイライラしていた。というより怯えていた。不安で仕方がないのだ。それを少しでも紛らわすため、セフィアを折檻したのだ。

社長はギドラニア神聖帝国との密約を結び、トルウェノへの裏切りを行なっている。

その見返りに、神聖帝国がオリハルコン採掘を始めたら、海外にある社長の口座に莫大な報酬が振込まれることになっている。社長は神聖帝国に移住し、その金で悠々自適に暮らすつもりだった。

しかし、いざ祖国がマガツに蹂躙されつつあるのを見ると、流石に後ろめたいものを感じた。

そして、元勇者がこの国に来た。どうやら大統領が苗床退治を彼に依頼したようだ。

いくら元勇者でも、神聖帝国の強力な魔導兵器……それこそ護天宝器クラスを使わなければ、苗床を倒すなど不可能のはず。

だが、素手でマガツの群れを蹂躙し、セフィアを圧倒する討伐数を弾き出した現実を見せつけられては、とても安心できない。

もしこのまま元勇者が苗床を倒してしまえば、社長は神聖帝国から報酬をもらうことができ

ない。たんに祖国を裏切ったという罪悪感だけが残る。
いや、それどころか。任務に失敗した社長のことを、神聖帝国が許すとは思えない――。

※

そして夜。
雷輝とシヅルがホテルで島の地図を確認していると、少佐から電話がかかってきた。昼の間に頼んでいた、短波通信装置の受診記録の件で、進展があったらしい。
早速、雷輝はシヅルを連れて大統領官邸に向かう。
すると執務室の机に資料を広げ、大統領と少佐が待ち構えていた。
「おお、ライキ。シヅル。これを見てくれ。君たちが言っていたとおりだったよ。苗床がトルウェノに飛来する五時間前に、短波受信機が一瞬だけ、強いノイズを受信したという記録が出てきた。ノイズなんて珍しくもないから、私のところまで情報が上がってこなかったんだ。苗床との因果関係があるなんて、言われないと思いつかないからね。それにしても、私ですら知らない情報を、どうして君たちが予言できたのかね？」
大統領は手品の種明かしをせがむ子供のような目を向けてくる。
「それに関しては、私よりも妹に説明してもらったほうがいいでしょう。シヅル、頼む」

「では説明いたしましょう。とは言っても簡単な話です。神聖帝国軍はつねに様々な兵器を開発していますが、その中に一つに『マガツ誘導装置』というものがあります――」

マガツ誘導装置は全てのマガツに通用するわけではない。だが苗床型の誘導には既に成功していた。一般にはあまり知られていない装置だが、軍とシヅルの大学の共同開発だった。というより大学が理論を軍に売り込み、予算を出してもらったのだ。

シヅルは大学にいた頃、プロトタイプの実物を見たことがある。

マガツ誘導装置は魔力波と電波の両方を使う。短波のノイズが出たのはそのためだ。

「このノイズの波形には見覚えがあります。まず間違いなく、この国でマガツ誘導装置が使用されたのです。マガツ誘導装置は存在を秘匿されているわけではありませんが、もちろんその実物と設計図は神聖帝国軍のものです。流出したとも売り出されたとも聞いていません。神聖帝国ですら試作段階なので、他の国で作るのも不可能でしょう」

「つまり、このトルウェノにマガツ誘導装置が存在するはずがないと言うことだな。神聖帝国が持ち込まない限り」

少佐の言葉にシヅルは頷いた。

「すると神聖帝国が苗床を連れてきたということか⁉　そして苗床を倒す見返りに、我々からオリハルコンを奪う……酷いマッチポンプだ！」

大統領は叫び、拳を握りしめた。悔しさで自分の皮膚を引きちぎりそうになっていた。

「それが連中のやり口ですよ。いつものことです」
対照的に雷輝は平然と呟く。神聖帝国を相手にするのに、この程度のことで逆上していては毛細血管が死滅してしまう。
「それにしても、お兄様。マガツ誘導装置はかなりの大きさです。この国の港は小さいので……着港できる輸送船に積むには分解しないと無理ですね。しかし、それを組み立てるのにも、ある程度の設備が必要です。この国でそんな設備を持っているのは……」
「ロレンス商会か」
雷輝から国一番の会社の名前が飛び出したのを聞き、大統領と少佐は絶句した。

※

ロレンス商会か、と目星をつけたところで、証拠は何もない。
大統領は噴火しそうなほど顔を真っ赤にして怒っていたが、証拠もなしに踏み込むわけにはいかないのだ。
そんな大統領をなだめるのは少佐に任せ、雷輝とシヅルはホテルに帰ることにした。明日は朝一番で苗床がいる場所に行くつもりだ。
「まだ八時を少し過ぎたばかりだというのに、ほとんどの店が閉まっていますね。歩いている

人も、走っている車もほとんどいません」
「発電所の出力がさほど大きくないんだよ。発電所を動かすには石油も必要だしな。だからトルウェノの人々は、夜になったら家に帰って寝るんだよ。それで早起きして畑仕事するんだ」
「……大きな工場があるわけでもないのに電力の心配なんて……これではポーション工場の建設など、しばらく先のことですね」
「ああ、そうだな。しかしオリハルコンの鉱山が見つかったんだ。もっと豊かになるよ。猫耳族は世間で思われているよりずっと勤勉だからな」
「あとは苗床を倒し、オリハルコンを奪おうとしている悪の帝国をなんとかすれば、全て解決というわけですね」
「そういうことだ……ん、あそこに人が倒れているぞ」
雷輝とシヅルは走り寄った。そして抱き起こしてみると、なんと青い髪の少女。ロレンス商会と専属契約しているという、セフィア・アルテナだった。
パッと見た限り外傷はない。しかし暗い街灯の下では断言できない。とにかく放置していくわけにもいかないので、担いで診療所まで運ぶことにした。
「おそらく過労ね。この子が最近、働きすぎってのは、どのハンターも言ってることだもの。もっとも、セフィアが戦っているからこそ町に被害が出ていないんだけど」

診療所の女医は診断を下した。雷輝はこの女医と昔から面識がある。四年前、雷輝が運んできた医薬品でトルウェノの人々を治療した一人なのだ。見た目は三十歳前後の美人だが、実年齢は知らない。

「とりあえず点滴を打ってるわ。この子の兄に使いをやったから、迎えにくるまで寝かせておきましょ」

「兄？　セフィアには兄がいるのか」

「ええ、いるわよ。ところでライキ。あなたは元勇者で、そして四年前にこの国を救ってくれた英雄だと信じているから見せるんだけど……妹ちゃんも一緒にちょっと来て」

女医はそう言って病室に入っていく。何事だろうと雷輝とシヅルは顔を見合わせつつ、女医のあとを追いかけた。

するとそこには、上半身裸でベッドにうつ伏せで寝かされたセフィアがいた。

「あー、お兄様！　見てはいけません、見てはいけません」

セフィアが半裸だと知った途端、シヅルはパニックを起こし、雷輝の目を塞ごうと背伸びをし、それでも届かないのでピョンピョン飛び跳ねた。

しかし、そのアホな振る舞いもすぐに止まった。セフィアの背中に、無数のミミズ腫れを見つけたからだ。

「これは……」

シヅルは険しい顔になる。同じ女性だからこそ、肌を傷つけられる痛みが雷輝よりも切実に分かるのだろう。

「今さっきつけられた傷も、ずっと前からのも、新旧様々よ。タバコを押しつけたようなヤケドもあるわ。ねえ、ライキ。マガツと戦って、こんな傷がつくものかしら？」

女医が雷輝に問いかける。

「少なくとも俺が知る限り、背中だけを狙って鞭を打ったり根性焼きをするようなマガツは知らないな」

「元勇者のあなたが知らないってことは、いないってことね」

マガツは相手をいたぶったりしない。ただ破壊して滅殺するだけだ。ゆえにこれは知性を持った者によってつけられた傷だ。人間とか、獣人とか。

「私はただのやさぐれ医師だから、この子がどうしてこんな目にあったのか詮索する気はないわ。ただ、あなたには教えておこうと思ってね。じゃ、背中の治療をするから、ちょっと席を外してちょうだい」

雷輝とシヅルは病室を追い出された。

と、丁度そこに、一人の男がやってきた。

二十代半ば。つまり雷輝と同じくらいの年齢だが、表情はずっと柔和。そしてセフィアと同じ青い髪だった。目の下に酷いクマがある。疲れ切った顔だった。

「あの、妹がここに運ばれたと聞いて来たんですが……大丈夫なんですか。まさかマガツにやられたとか⁉」
「ああ、それなら大丈夫。マガツは関係ないし、命に関わることでもありません。奥の病室で治療中ですよ」
　雷輝がそう言うと、彼はにへらと笑った。
「そうですか、よかった。妹はいつも無理ばかりしているので、心配で心配で」
「でしょうね。私たちが見つけたとき、かなり衰弱していましたから。ちなみに私はライキ・テンドウ。こっちは妹のシヅルです」
「シヅル・テンドウです」
「これはご丁寧に。イアン・アルテナです。もしや、お二人が妹をここまで運んでくれたんですか？　ありがとうございます。それにしてもライキ・テンドウ……どこかで聞いたような」
「ありふれた名前ですからね。ところで妹さんはハンターですが、イアンさんはどんなお仕事を？」
「はは、僕はしがない魔導兵器の職人ですよ」
　イアンがそう言うと、シヅルが話に割り込んできた。
「あの。わたくし、セフィアさんの魔導兵器を見せていただきました。すばらしい仕上がりです。セフィアさんはマガツを狩ることで、ロレンス商会の魔導兵器を宣伝していると聞きまし

たが……あれはとてもロレンス商会で作ったものとは思えません」
シヅルがそう言うと、イアンは表情を輝かせた。
「ああ。妹のは僕が作った特別モデルなんですよ。これの量産モデルが海外では売られています。僕の工場はロレンス商会の下請けなんですよ」
「海外で？　なぜ国内では売らないのでしょうか。マガツが増えた今、強力な魔導兵器が必要なはずですが」
「さあ？　僕は作るのは得意ですが、売るのは素人ですから。ロレンス商会にも考えがあるんでしょう。とにかく、僕のような下請けは言われたとおりに作るしかありません。恩もありますしね。僕たちの母親は、神聖帝国の病院に入院しているんです。その治療費はロレンス商会が払っているんです」
なるほど事情が見えてきた、と雷輝は頷く。それから声のトーンを落として語りかけた。
「妹さんの背中の傷を見ました。自分の妹があんな目にあっているのに、あなたはヘラヘラ従い続けるんですか？」
瞬間、イアンの顔に敵意が浮かぶ。
「……あなたに僕たちの何が分かるって言うんです？　お節介というものですよ」
そしてイアンは、治療が終わったセフィアを連れて帰ってしまった。
セフィアは帰り際、雷輝たちをチラリと見た。だが何も言わない。

※

雷輝は気にくわなかった。

妹のために立ち上がろうとしないイアンにも、セフィアがぶっ倒れるまで酷使するロレンス商会にも。

だから雷輝はシヅルをホテルまで送ってから、その足でロレンス商会の社長の家に向かった。

「驚きましたよ。まさか元勇者で、そして四年前にこの国を救ってくださったミスター・テンドウが訪ねてくるとは……それで、どんなご用件でしょう？」

応接室に通された雷輝は、勧められた葉巻を断りつつ、単刀直入に切り出した。

「セフィア・アルテナが道ばたに倒れているのを保護しました。ハンターというのは総じて常人より頑丈です。それがあそこまで衰弱するなんて普通じゃない。これは元勇者として……かつてマガツと戦うことを仕事としていた私からのお願いです。彼女をこれ以上酷使するのをやめてくれませんか？」

「はて？　あなたにそんなことを言う権限があるのですかな。ミスター・テンドウ」

「ありません。ですからお願いなのです」

「ふむ……それは聞けないお願いですな。というのも、そもそもセフィアはロレンス商会の社

員ではありません。ロレンス商会はセフィアの活躍に敬意を表して無償で魔導兵器を提供しているだけで、それを使うことを強制していません。ましてマガツ討伐数のノルマを設定したことなど一度もありませんな」

「なるほど。彼女が勝手に頑張っているとおっしゃる。ではついでに一つ質問です。イアン・アルテナはロレンス商会の下請けですね。彼に納品させた魔導兵器を、どうしてトルウェノで流通させないのですか？」

「我々は自分たちが作った製品の品質に絶対の自信を持っています。だからマガツの脅威に晒されている国内には、自分たちで作った魔導兵器しか流通させないのです。イアンに作らせているのは、あくまで海外用。国内の使用に耐えられる品質ではありませんよ」

「ほう、私とは真逆の見解ですね。私にはイアンの作った魔導兵器のほうが遥かに高品質に思えましたが」

「あなたは勇者を引退してから随分と経ちましたからな。判断を誤るのも致し方ないでしょう」

そう言ってロレンス商会の社長は葉巻の煙を、雷輝に向かって吐いた。

※

雷輝は社長の家を出てから郵便局に行き、神聖帝国に電報を打った。社長が明らかに信用な

らない男だったからだ。
勇者時代、何度も取材を受けたので、マスコミの知人もいる。新聞社の友人に頼んで、イアンたちの母親がどこの病院に入院していて、どんな病気で、治る余地があるのか否かを調べてもらうのだ。
今まで色んな嘘つきを見てきたが、社長はその中でも嘘をつくのが下手くそな部類だ。隠す気があるのかと疑うくらいだ。あんな雑魚から哀れな兄妹を守れなかったら、それは天堂雷輝の名折れである。

※

トルウェノの近隣に、神聖帝国の艦隊が待機していた。トルウェノ政府が要求を飲んだ瞬間に苗床を倒すためであり、そして何よりもトルウェノ政府を挑発するためである。
深夜。その神聖帝国艦隊から、ロレンス商会の社長のところに使者が来ていた。
既に社長は就寝しようとしていたが、そんなことはお構いなしだった。
「ライキ・テンドウを殺せ」
使者のメッセージは端的に表せばそういうことだ。
もし雷輝が苗床を倒してしまったら、神聖帝国はオリハルコン鉱山を手に入れることができ

なくなる。トルウェノが泣きついてくるまで、苗床には暴れてもらわねばならないのだ。

「もしこの計画が失敗したら、お前の命もないものと思え」

それは予想していた言葉だった。しかし、いざ言われると社長は体の震えを止められなかった。

使者が帰ったあとも社長は涙を流して怯えた。死にたくなかった。

なぜ自分が死なければならないのかと怒りすら湧いてきた。

そして自分の手駒の中で唯一、勇者に通用しそうなセフィアの家に電話をかける。

もう日付が変わろうという時間で、おまけにセフィアがさっき倒れたという事情は、社長にとってはどうでもよかった。

如何(いか)に元勇者が強くても、不意を突けば何とかなる。どんな方法でもいい。仮にセフィアが殺人犯として捕まることになっても構わない。とにかく雷輝が苗床を倒す前に殺すことができれば、それでいいのだ。

雷輝を殺すことに成功すれば、母親の治療費は恒久的(こうきゅうてき)に払ってやる。やらなければ今すぐストップする。そう約束すれば、セフィアは動かざるを得ないだろう。

そうだ、それしかない。相打ちでもいい。セフィアには死んでも雷輝を殺してもらう。なぜなら社長は死にたくないのだ。

※

初恋の人は、会ったこともない勇者様――。
兄にすら教えていない、セフィア・アルテナのささやかな秘密だった。
初めてライキ・テンドウの名を知ったのは、七年前。最年少の勇者が誕生したと神聖帝国が大々的に宣伝し、このトルウェノで発行している新聞でも、一面記事になっていた。
確か、あのときの彼は十七歳。
とても精悍（せいかん）な顔立ちで、自信に満ちあふれていて、しかし今思えばまだ幼さが残っていたかもしれない。だが、まだ九歳だったセフィアから見れば、大人そのもの。
勇者になるというのがどれほどのことなのか、ちゃんと理解していたわけではない。
それでも、とても凄い人で、格好いい人。
最初のうちは、そんな軽い憧（あこが）れから始まった。
しかし、ライキ・テンドウが一人で大型マガツを倒すたび、一人で千体のマガツを倒すたび、一人で国を救うたび。新聞は彼の活躍を伝えてきた。
いつしかセフィアは毎朝、彼の記事が載っていないか、新聞に目を走らせるようになっていた。
そして、自分も彼のように強くなりたいと想うようになる。誰（だ）かを守る力が欲しいと願うようになる。ライキ・テンドウの隣に立って剣を振りたいと恋い焦（こ）がれるようになる。
そう。まだ会ったこともない勇者様に、恋をした。

今のセフィアがトルウェノ最強のハンターになれたのは、幼い頃の恋のおかげ。
だが、いくら力が強くても、太刀打ちできない厄災がトルウェノを襲った。
疫病と飢饉。
疫病で父親が死に、その後も感染はどんどん拡大し、飢饉も起きて、もうこの国は駄目だと誰もが諦めた、そのとき。
勇者を引退し、ビジネスマンになったライキ・テンドウが、大量の薬と食料を持って現われたのだ。
その姿は遠目に見ただけだが、新聞の写真でしか知らなかった彼を、この目で見ることができた。それだけでセフィアは幸せだった。
勇者を引退しても、ライキ・テンドウは誰かを救うため、戦い続けている。単純な戦闘力だけではどうにもならない問題でも、彼ならどうにかしてしまうのだ。
手が届かない。ただ眩しい。憧れの人。
そんな彼と、肩を並べてマガツと戦う日が来るなんて、想像もしていなかった。
そんな彼を、殺せと命じられる日が来るなんて、想像もしていなかった。
頭が真っ白になる。
彼に斬りかかる自分を想像するだけで膝が震える。
刃を心臓に突き刺す光景など、吐き気すら催す。

いや、セフィアの想いを論ずる以前に、彼は最強の勇者なのだ。
セフィアが百人いても勝てる確率はゼロに等しい。
直接見たのは一瞬だったが、彼の強さを実感するには一瞬で十分すぎた。
あの男に戦いを挑む？　馬鹿馬鹿しい。不可能というのは、こういうときに使う言葉だ。
少女として、戦士として、二重の意味でセフィアは恐怖する。
だが、やらなければ母親が死んでしまう。
勝てる確率は、万に一つもない。しかし億に一つ、兆に一つくらいならば。
そんな賭けにもならないような賭けを成功させないと、母親が死ぬ。
成功すれば、この手で憧れの人を殺すことになる。
セフィアは社長からの電話を終えた途端、選択の重みに耐えきれず、トイレに行って胃液を吐いた。
とはいえ、答えは初めから決まっている。
今までセフィアとイアンは、母の病気を治すため、母が帰ってくる場所を守るために戦ってきたのだから。

第二章　労働の対価

雷輝とシヅルがトルウェノに来て二日目の朝。

『シヅル、おはよう、今日も綺麗だね……シヅル、おはよう、今日も綺麗だね……』

雷輝は自分の声が繰り返されるのを聞いて目を覚ました。

それはシヅルが作った小型録音機を更に改良した目覚まし時計の音だった。その小型録音機は胸ポケットに収まるほど小さい。彼女は雷輝の声のサンプルを集めて、いつの間にかこんなアホな装置を完成させていたのだ。

「おいシヅル。技術力の無駄遣いはやめろ。あと、明日からは自分の部屋で寝ろよ。せっかく大統領が二部屋用意してくれたのに、同じ部屋で寝たら意味がないだろう」

「まあ、お兄様。それを言うなら、せっかく二人同時に脱サラしたのですから、二人で過ごさないと意味がないでしょう」

シヅルは意味不明な理論を呟きながら、布団から這い出してきた。雷輝は『妹が少しでも真人間になりますように』と願いを込め、妹の額にチョップを振り下ろした。

その三時間後――。

「……あれを素手で倒すのはちと無理か」
伏せた姿勢で苗床型マガツを目視で確認した雷輝は、そう呟いた。
「え……今まで素手で倒すおつもりだったのですか……流石はお兄様！」
一緒に伏せていたシヅルは、最初ギョッとした顔になったが、すぐに目を輝かせた。めまぐるしく表情を変えるのは忙しそうである。
雷輝とシヅルは切り立った崖の上にいた。そして見下ろす先には広大な森が広がっている。
その森の中に苗床はいた。
全長は百メートルを超えている。雷輝が一・八五メートルだから、五十倍以上の大きさだ。
単に大きいというだけでなく、外見が醜悪。端的に言い表すと、肉塊。
様々な臓物をこねくり回してタワーを作ったような、生理的嫌悪感に訴えかける造形をしている。そんな肉塊の表面が、ときおりボコボコと泡立つように膨れ上がり、そして小さなマガツが飛び出してくる。苗床はそうやって、常に新たなマガツを産み落とすのだ。
「でかすぎて殺しきれない。苗床は再生力も半端じゃないしな。それにあの周りには、護衛のマガツがわんさかいるはずだ。一度、町に帰ろう。幸いにもイアンという腕のいい職人も見つけたことだし」
「あら、お兄様。わたくしがいるではありませんか。言ってくだされば、いつでもお兄様のために魔導兵器を作りましょう。あるいは、わたくしそのものを――」

「どちらも却下だ。前にも言ったが、苗床を倒しても、奴が産んだマガツまで消えるわけじゃない。残りはこの国の力で何とかしなきゃいけないんだ。だから可能な限り、この国に頑張ってもらいたいんだよ」

雷輝とシヅルは首都に向かう。出発したときは自動車だったのだが、道が険しすぎて途中から徒歩になってしまった。ここから二十分ほど、森の中を歩かねばならない。

雷輝はスーツだが問題ない。シヅルはどこから出してきたのか本格的な探検家ルックなのでこれも心配ない。シヅルの体は小さいが、別に体力がないわけではないのだ。

しかし無論、ハンターほど強くない。

だから雷輝は、向けられた敵意からシヅルを守るため、真横に飛んでシヅルから離れた。

「お兄様⁉」

シヅルがそう叫んだとき、雷輝の眼前に敵が迫っていた。それは小柄な人影。仮面で顔を隠しているから人相は分からないが、動きを見れば誰なのかは一目瞭然。

森の中から現れた襲撃者は双剣をきらめかせる。

昨日、雷輝ですら感嘆の声を漏らしてしまったほどの斬撃が、左右から同時に迫る。

あまりにも速すぎて視界の悉くを埋め尽くす――斬撃斬撃斬撃斬撃斬撃斬撃斬撃斬撃斬撃斬撃斬斬斬斬斬薙薙斬斬斬斬薙薙薙斬斬斬斬斬斬斬薙薙斬斬斬斬斬斬斬斬斬薙薙薙薙斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬薙薙薙薙薙薙斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬。

こんな田舎の島国で、よくぞここまで練り上げたと雷輝は感心する。ろくな師匠もいなかっただろう。おそらくは独学。天才と評して問題ない。だが、しょせんは独学。そして如何に速くとも剣は二本。ゆえに二本の腕で相手の手首を掴んでしまえば、ほら、このとおり。斬撃は止まってしまう。

「なっ――!?」

仮面の襲撃者は驚愕の声を上げ、固まってしまう。まさか一太刀も浴びせることなく、素手で止められると思っていなかったのかもしれない。だがこの程度、勇者どころか騎士クラスでも可能だ。

雷輝はそのまま襲撃者の腕をひねり、双剣を奪い取る。そして相手の仮面を斬り裂いた。

露わになった顔は見知ったもの。セフィア・アルテナに他ならない。

「やあ、こんなところで会うとは奇遇だね。この先は苗床がいて危険だ。剣の稽古ならよそでやるんだな」

「っ！」

セフィアは逃げた。双剣を取り返そうともせず、脱兎の如く逃げた。

「追うぞシヅル」

「きゃ、お兄様、そんな急に！　心の準備が……！」

雷輝はシヅルの言葉に耳を貸さず、両腕で抱き上げて走り出した。既にセフィアには距離を

離されている。おまけにシヅルを運んでいるので、無茶な加速はできない。それでも追いつくのが無理でも、追いかけるのは十分に可能だ。

※

いつの間にか雨が降っていた。
セフィアは全身をずぶ濡れにしながら、兄のいる工房によろよろと逃げ込んだ。
あこがれの人に刃を向け、殺すつもりで斬りかかり、失敗した。
全ては母親を救うという大義名分のためだったが、これで全てが台無しになった。
セフィアは自分の気持ちを裏切り、そして母親も失うことになるのだ。
雨がどれだけ体を冷やしても、頬を流れる涙は熱かった。
しかし体は震える。
「お兄ちゃん……お兄ちゃん……」
セフィアは兄を呼びながら、工房の床に力なく座り込む。
四年前の疫病で父が死んでから、兄イアンが必死に守ってきた工房だ。
魔導兵器は剣や槍のようなものから巨大な戦艦まで様々だが、個人の工房で作ることが可能なのは当然、小型のものだ。

熱と魔力を同時に加えてマギメタルを溶かす特殊な炉。刀身を作るための鍛冶師の設備。魔術演算を行うコアの調整装置。そういった道具が並ぶ場所。

ロレンス商会の下請けになってからも、兄は無茶な要求に全て応えてきた。

母の治療費のために。

しかし、セフィアが失敗したせいで、兄の努力も水泡に帰す。

「セフィア？　どうしたんだセフィア！　何があったんだ⁉」

イアンはずぶ濡れのセフィアを見つけると、慌てた様子で駆け寄ってきた。

それを見て、自分は酷い顔をしているんだろうな、とセフィアは思った。

どう謝ればいいのだろうか。

「お兄ちゃん……ごめんなさい。私、失敗しちゃった……きっとロレンス商会は、もうお母さんの治療費を払ってくれない……」

「何を言っているんだ？　セフィア、社長に何か言われたのか？　ちゃんと説明してくれ！」

イアンはセフィアの肩を掴んで叫ぶ。

無理もない。

今までずっと、母の治療費のために耐えてきたのだ。それが無駄になったと聞かされたら、誰だって狼狽する。

セフィアは事情を説明しようとした。が、体が震えて、上手く声を出せなかった。

それを見たイアンは、奥からバスタオルを持ってきて、頭を拭いてくれた。
今の自分にはこんな優しくしてもらう価値などないというのに。
「……お兄ちゃん。私、人を殺そうとしちゃった……でも殺せなかった……駄目すぎる。消えちゃいたいくらい。どうしたらいいのか分からない……」
「え、ちょっと待って、人を殺す……？　どういうことなんだセフィア。急に言われても！」
セフィアの口から漏れた台詞は、イアンを混乱させただけだった。
気の弱い兄は、殺人というものを想像しただけでこうなってしまうのだ。
だからセフィアは相談せず、一人でやろうとした。
きっと相談したら、止められただろう。
どうせ失敗するなら、そのほうがよかったかもしれない。
だが、そうしたらセフィアとイアンは、自分の意思で母親を見捨てることになる。これもやはり殺人だ。
結局、どうすればよかったのだろうか？
と、セフィアが放心しているところに『あの人』が現れた。
セフィアが憧れ、殺そうとした人。
「そう気に病むな。俺は五体満足だ。しかしターゲットが俺でよかったな。未遂で済んだ。ああ、それから忘れ物だ。兄貴に作ってもらった大切な双剣なんだろ。捨ててきちゃ駄目だぜ」

元勇者にして、この国を救ってくれたビジネスマン。ライキ・テンドウ。
それに続いて、妹のシヅルも工房に入ってきた。
「お兄様の命を狙うという罪、万死に値しますが、のっぴきならない事情がお有りのようなので、釈明の機会を差し上げましょう」
その兄妹の姿を見て、セフィアは肩が震えた。
なにせ殺そうとしたのだ。ならば殺されても文句を言えない。
「どういうことなんだ……セフィア、お前はこの人たちの命を狙ったのか……？　なぜ……」
「そう、俺もそこが知りたい。俺は君に出会ってまだ二日目だ。命を狙われるほど恨みを買った覚えはない。君は俺が死んでも得をしない。誰が何のために命じたのか想像はできるが、君の口から聞きたいな」
ライキの声は、驚くほど穏やかだった。
命を狙われたことなど、何とも思っていないかのようだった。
きっと、元勇者からすれば、田舎のハンターの攻撃など、蚊に刺されたほどにも感じないのだろう。しかし、彼がどう思おうと、殺そうとした事実は変わらない。
セフィアは、求められるままに事実を語る。それ以外に、何をしていいか分からなかった。
「ローレンス商会の社長……でも理由は知らない……本当です」
信じてくれるだろうか？

分からない。嘘と断じられ、拷問されるかもしれない。このまま一刀両断にされるかもしれない。それを思うと、セフィアは血の気が引いた。イアンにしがみつき、小刻みに震えた。

イアンはそんな情けない妹を抱きしめてくれたが、何せ殺人未遂の告白を受けたばかり。もともと修羅場に不慣れな人なので、言葉も出てこない。

兄に要らぬ負担をかけている。そのことも申し訳ない。とにかく、何もかもが自分のせいだ。

「社長は君に命令だけしたのか。それなのに君は俺を殺そうとした。なぜだい？　君は殺せと言われたら、簡単に人を殺すのかい？」

「ち、違う！　違います……私は……だってそうしないとお母さんの治療費を払わないと言われたから……あなたを殺せば、これからずっと治療費を払ってくれるって約束されたから。もう、今みたいに寝る暇もなくマガツを狩らなくてよくなる……お兄ちゃんだってずっと働きっぱなしだし……だけど、私は間違ってた。人を殺そうとするなんて……それも、四年前にこの国を救ってくれた英雄を……」

英雄を殺そうとするなんて。いや、相手が誰であろうと、どんな理由であろうと。

人を殺そうとするなんて、許されない。

なのに口から出てくるのは言い訳の言葉。

ああ、本当に情けない。セフィアは心底、自分は死んだほうがマシだと思った。

「そうか、ライキ・テンドウ……どこかで聞いた名だと思っていたら、あの英雄！」

イアンは、ようやく彼が誰なのか思い至ったらしい。
かつては七大勇者の一人で、そのあとは一流のビジネスマンになって、ずっと誰かを助け続けてきた人。
セフィアの憧れの人。初恋の人。
「……テンドウさん。私はあなたに憧れていました。ハンターになったのも、最初はあなたみたいになりたかったから。それなのに私はあなたを殺そうとした……双剣を奪われたとき、実はホッとしたんです。やっぱりライキ・テンドウは無敵で、私ごときでは敵わなくて、殺さずに済んで……でも、それは私たちのお母さんが死ぬことを意味していて……自分の母親が死ぬのにホッとするなんて……私は誰も殺したくないけど、お母さんにも死んでほしくない……どうしたら、どうしたら……！」
セフィアの声は少しずつか細くなり、絞り出すようなものになっていく。そして瞳の焦点がぶれる。視界がぼやける。
「セフィア……そんな、お前、僕に一言……いや僕に言っても仕方がないのか……ごめんよ、頼りにならない兄貴で……」
イアンは悪くない。兄は自分の仕事をこなしていたのだから。
悪いのは、ロレンス商会の命令に応えられなかったセフィア。
だが、しかし。それが成功していたら、セフィアは憧れの人を殺していた。

成功しなかったから、母は助からない。
「セフィア。君はこれから自分がどうすべきだと思う？」
ライキは淡々とした口調で問いかけてきた。
「……自首、します。未遂とはいえ、人を殺そうとしたんですから……もしあなたがここで死ねと言うのであれば、自害します」
償い方が分からない。
その程度のことしか思いつかない。
「なるほど。誠実な獣人なんだな。しかし、それは思いとどまってくれ。君が逮捕されたって、俺は少しも得をしない。そんなことよりも、ロレンス商会が君たち二人にしたことを暴くほうが、ずっと建設的だぜ」
そう言ってライキは、懐から一枚の紙切れを取り出した。
セフィアは立ち上がることもできないので、イアンが代わりに受け取る。
受け取ったイアンは、「え……？」と間の抜けた声を漏らす。
そして、紙切れを見せられたセフィアも、同じように声を出してしまった。
「昨日の夜、神聖帝国の新聞記者に電報を打ったんだ。有能な奴でね、今朝には返事が返ってきた。そこに書いてあることは確かな情報だと思っていい。君たちは母親に最先端の治療を受けさせるという約束でロレンス商会に従っているが、実際は粗末な治療しか受けていない。と

りあえずの延命措置で、そう長くは保たないらしい。ロレンス商会は君たちをこき使うだけこき使っておきながら、対価は支払っていなかったというわけだ」

「じゃあ、お母さんは助からない……？」

セフィアの声は、絶望で染まっていた。

ライキを殺そうが何をしようが、初めから全てが無駄だった。

「ああ、このままだとな。だが、まだ間に合う。幸いにも俺がここにいる。君らの技術を使って金を稼ぐすべを知っている。治療費を払ってなお余裕のある儲けだ」

ライキはセフィアの絶望とは真逆に、自信に満ち満ちている。

理解が追いつかない。

「僕らの技術で……？　そんな、急に言われても……いや、あなたならできるかもしれない。四年前にこの国を救ってくれたビジネスマンですからね」

セフィアよりイアンのほうが気持ちを切り替えるのが早かった。

そしてセフィアも、イアンの言葉を聞いて、その気になってきた。

そうだ。ライキが言っているのだから、そうなのだろう、と。

「俺を信じてくれるなら、今までの稼ぎが何だったのかって世界に連れて行ってやるよ」

「いや、僕らはそんな大金は別に……」

「自分に欲がないのを美徳だと思っているのかもしれないが、この国の現状を考えればむしろ

悪徳だぜ。おかげでロレンス商会がデカイ顔をしているんだ。イアン、あんたが作る魔導兵器は高品質だ。なのにロレンス商会はマガツだらけの国内では売らない。なぜか？　この国が強くなっちゃ困るからだ。ロレンス商会は祖国を神聖帝国に売り飛ばそうとしている。オリハルコンという付加価値をつけてね。そういうやり方は許しちゃいけないんだ」

何て力強い言葉なのだろうか。セフィアは、新聞記事でしか知らなかったライキを目の当たりにして、完全に夢うつつだった。

新聞記事などとは、比べものにならない。

命を狙ってきた相手を前にして、そのことを糾弾するでもなく、そもそも気にした様子もなく、未来の話だけを紡ぐ。

憧れの人は、憧れよりも素敵だった。

「イアン。あんたが作っているのはロレンス商会に納品する分だけか？　自分のブランドはないのか？」

「実はありますよ。小さな武器屋に置いてもらっています。質には自信があるのですが……全く売れませんね」

「オーケー。もうロレンス商会との仕事はするな。自分のためだけに魔導兵器を作れ。安心しろ。生産が追いつかないくらいの人気商品にしてやるさ。そうなってもらわんとこの国はマガツに対抗できない。セフィア、君もだ。これからはロレンス商会ではなく、兄のブランドを掲

げてマガツを倒せ」

ライキは、さも簡単なことのように言う。

だが、そんなことをしたら、ロレンス商会は絶対にイアンとセフィアを許さないだろう。

たんに母の治療費をストップするだけでなく、強烈な報復をしてくるに違いない。

そんなセフィアの心配が顔に出ていたのだろう。

ライキは微笑(ほほえ)んでウインクしてきた。

「勘違いするな。目を覚ませ。君らは奴隷(どれい)でも社畜(しゃちく)でもない。どんな仕事をするか選ぶ権利がある。理解したか？　じゃあ景気付けにロレンス商会をぶっ潰(つぶ)すとしようか」

結局、ライキはセフィアに対して、命を狙ったことを責めなかった。

ただ事情を聞いただけ。

あまりにも軽く流されたので、もしかして自分がしたことは大したことがなかったのでは、なんてセフィアは一瞬、思ってしまった。

無論、そんなわけはない。

罪は消えない。

しかしセフィアは今、不埒(ふらち)なことに、自責の念よりも、ライキへの恋心を一層、強めていた。

※

計画は至ってシンプルだ。まず、イアンがロレンス商会に納品する予定だった魔導兵器の中から、剣型のものを一本だけ雷輝が拝借する。

そして雷輝とセフィアでマガツを狩りまくった。イアンが作った魔導兵器は、雷輝の魔力をスムーズに吸い上げ、切れ味と強度に変換する。思ったとおり、彼は腕のいい技師だ。

雷輝とセフィアの鬼神の如き戦いっぷりは、他のハンターたちに目撃され、評判になった。セフィアはもともと国一番のハンターだし、雷輝も元勇者として有名だ。しかし二人が組んだときの討伐数は、ハンターたちの想像を絶していた。

誰も見ていないところでも狩りまくった。ギルドからの報酬目当てではないので、死体を放置したまま申告しなかった。そのせいで誰が倒したのか分からないマガツが山積みになり、雷輝とセフィアの仕業だと噂になった。噂が噂を呼んで半ば伝説と化していった。

マガツを倒すのと並行して、雷輝は自分の使っている剣が、イアンの作った魔導兵器だと宣伝する。ギルドのロビーやパブで吹聴しまくった。無論、セフィアの双剣も、実はロレンス商会ではなくイアン製であると伝えるのも忘れない。

セフィアがロレンス商会の広告塔なのは有名だった。セフィアの双剣といえば、ロレンス商会の象徴ですらあった。それが実は下請けに作らせた魔導兵器だったというのは、トルウェノのハンターたちに激震を走らせた。

当然、ハンターたちはイアンの魔導兵器を買いたがる。しかしロレンス商会の店に行っても、そんなものは扱っていないと言われてしまう。他の武器屋でもごく少数しか流通していなかった。ほとんどの者が買えない。需要が高まる中、少数の者たちから口コミでどんどん好評が広がっていく。

その間、イアンは魔導兵器を作り続けた。シヅルもそれを手伝うが、あくまで助手。イアンが自力で作れる以上の品質のものが出来上がっては意味がないのだ。

そして二週間後、三百五十本の剣型魔導兵器が完成した。その中から、まず五十本だけ市場に流す。売りに出した途端に瞬殺。その高性能っぷりに、ロレンス商会の魔導兵器は何だったのかという声が広まる。

ロレンス商会は当然、面白(おもしろ)くない。

ロレンス商会は、セフィアとイアンを契約不履行(ふりこう)で訴えることも検討していると新聞にコメントを出した。

よし来たとばかりに雷輝はラジオに出演する。

「ロレンス商会は何か誤解をしているようです。私はセフィアとイアンの名誉のために、その誤解を解きたいのです」

そんな白々(しらじら)しいことを言いながら、雷輝は電波に社長の肉声を流した。

シヅルが開発した小型録音機。実はロレンス商会の社長と面会したとき、雷輝はそれを胸に

忍ばせていたのだ。会話は全て録音してある。

『そもそもセフィアはロレンス商会の社員ではありません。ロレンス商会はセフィアの活躍に敬意を表して無償で魔導兵器を提供しているだけで、それを使うことを強制していません。またしてマガツ討伐数のノルマを設定したことなど一度もありませんな』

『我々は自分たちが作った製品の品質に絶対の自信を持っています。だからマガツの脅威に晒されている国内には、自分たちで作った魔導兵器しか流通させないのです。イアンに作らせているのは、あくまで海外用。国内の使用に耐えられる品質ではありませんよ』

社長の肉声は、編集の必要がないほど国民を馬鹿にしていた。

イアンの魔導兵器が強力であることくらい、この国のハンターでも分かる。今、マガツによって国が脅威にさらされているとき、どうしてイアンの魔導兵器を海外に持っていってしまったのか。まるで合理的な理由がない。

そしてセフィアが必死にマガツと戦っているのは誰もが知っていた。きっとノルマがあるのだろうと皆が予想していた。だがロレンス商会の社長は、ノルマなど設定していないと明言している。そのくせ契約不履行で訴えようとしているのだから、これは筋が通らない。支離滅裂にもほどがある。

「イアンとセフィアの母親は重い病気です。神聖帝国で最先端の治療を受けないと絶対に助からないほど重症です。しかし二人にはその治療費を払う金はなかった。そこでロレンス商会が

治療費を払う代わり、二人を奴隷のようにこき使ったのです。ですがロレンス商会は治療費を払っていなかった。二人の母親は確かに神聖帝国の病院に入院しましたが、それは田舎の小さな病院でした。とても最先端とは言いがたい治療しか受けていません。ロレンス商会は兄妹を騙しました。そして過剰な宣伝費と反比例するような低品質の魔導兵器を流通させ、国防をも揺るがしています。このような行ないは、同じビジネスマンとして絶対に許せません――」

※

ラジオに出演した次の日、雷輝は再び崖の上に立っていた。見下ろす先には森が広がり、そしてマガツの苗床がいる。

傍らにはシヅルとセフィア。そしてイアンが作った剣が……八本、雷輝を取り巻くように地面に突き刺さっている。

「じゃ、トドメを刺すか」

トドメ。それは直接的には苗床に対してだが、間接的にはロレンス商会に、だ。

あのラジオ放送のおかげで、国中がロレンス商会のアンチであふれかえっている。もはや魔導兵器だけに限らず、ロレンス商会の系列店全体に対しても不買運動が始まろうとしていた。

ここでイアンの作った魔導兵器で苗床を倒せば、大勢は決定的となる。

「今更だけど、どうして八本も持ってきたんですか……？」
セフィアは不思議そうに首をかしげる。
するとシヅルが〝然り〟という顔で頷いた。
「全くです。わたくしが手を加えれば、八発くらいならオーバーヒートせずに済むのに。どうしてもイアンさんが作ったままで使用することにこだわるのですから。お兄様は誠実すぎます」
「え、どういうことです……？」
まだセフィアは分かっていないようだ。まあ無理もない。勇者と普通のハンターでは常識が異なるのだから。
「セフィア、よく見ておけ。お前の兄貴が作った魔導兵器は、使い手次第でこういうこともできるってことを――」
雷輝はまず右手で剣を取り、魔力を流し込む。コアが演算を始め、刀身にエンチャントを施す。そして雷輝が剣を振ると、刃の先端から苗床めがけて光が走った。目もくらむような閃光だ。それは苗床に着弾し、大爆発を引き起こす。
爆発が起きたとき、既に二発目の閃光が苗床に迫っていた。雷輝は左手で二本目の剣を振っていたのだ。小さなビルなら消し飛ぶような攻撃の二連射。このとき左右の剣は、どちらもオーバーヒートしていた。雷輝の魔力に耐えられず、コアも刀身も融解寸前だった。
ただの一振りで魔導兵器が使い物にならなくなる。本来ならどんな粗悪品でもあり得ない。

そこまで完成度が低いと、そもそも起動すらしないだろう。

ましてイアンの魔導兵器は高品質だと雷輝もシヅルも認めている。にもかかわらずのオーバーヒート。

それだけ勇者という存在が他と隔絶している証拠であり、そこまで鍛えなければ大型マガツは倒せないのだ。

勇者は神聖帝国から、技術の粋を結集したハイエンドな魔導兵器――俗にいう『護天宝器』を渡される。護天宝器クラスのものでなければ勇者の力には耐えられず、それですら一度の戦闘ごとに入念なメンテナンスが行われる。

しかし、ここに護天宝器はない。ゆえにこそ八本だ。

雷輝は使い物にならなくなった二本を捨て、次の二本を手に取った。合計八発の閃光が苗床に襲いかかり、大爆発に次ぐ大爆発で巨体を包み込んだ。

エネルギー密度が異常な状態になり、空気分子がプラズマ化。火球が膨張し、周辺が気化。熱波で木々が炎上していく。衝撃波が枝をへし折る。

「くっ――」

セフィアとシヅルはたまらず顔を覆っていた。何キロメートレも離れているのに、爆発の光が眩しかった。

やがて火球が消え、空に小さなキノコ雲だけが残る。森の一部がえぐれて荒野になっていた。

そこにはバラバラになった苗床が転がっていた。もはや原型が分からない。ただの肉の塊だ。
それにしても、流石はイアンの魔導兵器。八本とも役目を果たした。これが並の品質だったら、雷輝が魔力を流した時点で故障していただろう。
「悪いなセフィア。イアンの剣を八本も駄目にしてしまった。けど、これで終わったよ。それじゃ、町に帰って皆に言いふらそう。お前の兄貴の剣が苗床を倒したってな。それから倉庫にある魔導兵器を全部売りに出すんだ。きっと凄い値段で売れるぜ」

※

それはもう凄い値段で売れた。
倉庫にあった三百本の魔導兵器は、販売初日で完売。ロレンス商会で売られている魔導兵器は十万ラエル前後だが、こちらは強気に出て、その五倍の値段で売った。なのにハンターたちが殺到した。彼らはイアンの魔導兵器が売りに出されるのをずっと待っていたのだ。
売り上げは、一億五千万ラエルである。
「まさか億の大台に乗るなんて……こんな大金が自分たちの物になる日が来るなんて、想像もしていませんでしたよ」
空になった倉庫で、イアンは興奮した声を出す。

「これは序の口さ。自動車や魔導兵器を売るには、性能以上に物語性が必要だ。あんたはその物語を手に入れた。いずれ国外からも客が来る。それに魔導兵器は売ったらそれで終わりじゃない。日々のメンテナンスも必要だ。アフターケアだけでも安定した収入になる。そして、あんた自身が技を磨き続け、より強い魔導兵器を作り続ければ、ハンターはその新製品も買ってくれる。一億五千万ラエルはただのジャンプ台さ。金は使い方を間違わなきゃ、使えば使うほど増えるんだ」

「ええ。これだけあれば母の治療費を払えるし、ロレンス商会に頼らず自分でマギメタルを輸入することもできます。頑張りますよ。これも全てライキさんのおかげです。本当にありがとうございます」

「別に礼を言われるほどのことはしてないよ。苗床を倒すのに使った八本をタダでもらったしな。それにこの国のハンターにはいい武器を使ってマガツを倒して、治安を回復してもらわなきゃ俺が困る。これからオリハルコンを採掘するんだから」

「オリハルコンの採掘ですか……凄いですね。ライキさんは僕とそう変わらない歳なのに」

「あんたの技術だって大したものだよ。シヅルが褒めてたぜ。少しアドバイスしただけで、どんどん吸収していくから教えるのが楽しいって」

「そう、シヅルさんです。あの三百本の魔導兵器を作る間、僕はずっと彼女の技に圧倒されていました。悔しいですよ」

「シヅルは俺と違って本物の天才なんだ。あまり参考にするな」
「僕から見たら方向性が違うだけで二人とも天才ですよ。実はこの間まで、自分とセフィアもそうだと思っていたんですが、井の中の蛙だと思い知らされました」
「そう卑下することはない。あんたもセフィアも、ちゃんとした師がいれば、まだまだ伸びるさ。丁度、俺はセフィアに、シヅルはあんたに、いくらか教えてやれることがある。しばらくはこの国を拠点にする予定だ。その気があるならコーチするぜ」
「願ってもないことです。是非よろしくお願いします。しかし不思議です。どうしてライキさんは僕らにそこまでしてくれるんですか？　これはもうビジネスの範疇じゃないでしょう」
「いいや、ビジネスさ。俺はあんたら兄妹を使って儲けるつもりでいる。けど、そうだな……境遇がちょっと似ていたから、放っておけなかったんだ。俺はかつて、シヅルを治療させるために神聖帝国軍に入った。気がついたら七大勇者なんかになっていた。俺はシヅルみたいな目に遭う人が二度と出てこないよう、必死に戦って強くなった。しかし俺の戦いは結局のところ神聖帝国の利益にしかならない。世界全体を救うことにはならなかったんだ。世界を救うには、もっと根本的なところを変えなきゃいけない」
「スケールが大きすぎて、僕なんかは圧倒されるばかりですね。あなたの力になれるかは分かりませんが、これからもよろしくお願いします」
　イアンが手を差し出してきた。雷輝はそれを握り返した。イアンは顔こそ柔和だが、その手

はマメだらけだった。技術を得るため、どれだけ鍛錬してきたか一瞬で分かった。一日で一億五千万ラエル稼ぐ手だ。

「ああ、こちらこそよろしく頼むぜ」

※

一方この世には、他人を利用し、騙し、蹴落とすことでしか金を稼げない子悪党もいる。

雷輝の部屋まで訪ねてきたロレンス商会の社長は、土下座し、額を絨毯に擦り付けた。そんなことをされても冷ややかな気持ちしか湧いてこないが、一応は話を聞いてやることにした。

「で、俺にどうして欲しいんです？」

「吾輩を守ってください……吾輩を神聖帝国から守ってください……それをできるのはあなただけです……」

社長は涙と鼻水でホテルの絨毯を汚しながら、必死に懇願した。なにせ彼は失敗したのだ。ならば神聖帝国に消されるのがオチ。必死にもなろう。

「守る？　はてさて。あなたは神聖帝国に狙われるようなことをしたんですか？　それを聞かせてくれないと、守りようもありませんね。ほら、いい加減、正直になったらどうです？」

「わ、吾輩は神聖帝国の命令でマガツ誘導装置を仕掛けた。それで苗床を呼んで、神聖帝国が

オリハルコンの鉱山を手に入れて……吾輩は報酬をもらうはずだった。しかし失敗した。あんたのせいだ！　元勇者のくせに、こんな田舎の国に加担して……全部あんたのせいだ！　あんたには吾輩を守る義務がある！」

「物の頼み方を知らない御仁だ。それに土下座する相手を間違っている。俺にではなく、セフィアとイアンにだ。いや、違うな……あんたはこの国そのものを裏切った。謝るべきは国民全員にだろう。許してくれるとは思わないがな」

「そ、そんな……！」

「知ってるか？　既に軍の情報部と警察が合同で、ロレンス商会の捜査を始めてるんだ。あんたの命令でマガツ誘導装置を組み立てたって社員からの証言も得ている。そして社長自ら、わざわざこうして訪ねてきて自供してくれた。神聖帝国に消される心配をするより、国家反逆罪で死刑になる心配をするんだな」

雷輝は胸ポケットから小型録音機を取り出して見せびらかす。

社長は初めポカンとした顔をしていたが、それが自分の命運を握る物だと感づいて、奪おうと飛びかかってきた。無論、元勇者から奪えるわけがない。

「往生際が悪いな。あんたはもう終わってるんだよ。程なくして逮捕状が出ると思うから、それまで束の間の自由を楽しんだらどうだ？」

「ふざけるな！　なぜ吾輩が逮捕されなければならない？　吾輩が何をした！　金を儲けるこ

とが悪いことか！　お前だって金儲けをしているだろう！」

「こりゃ驚いた。俺がやたら下に見られているのか、それともあんたの自己評価が高いのか知らないが、一緒にされるとは心外だ。いいか、あんたはあの兄妹を利用した。なのに対価を払わなかった。俺はそれを最も許されざる犯罪だと思っている。別に感情的な話をしてるんじゃない。労働力ってのはな、マギメタルや石油や土地と同じで有限の資源なんだよ。誰かが独占したら世の中が回らなくなるし、使えばすり減る。人材は国の資源なんだ。だからそれぞれの国の法律で、これ以上使ってはいけないというラインが決められているわけだ。あんたはそのラインを超えた。不当に国の資源をすり減らして利益を上げようとした。率直に言って、万死に値すると思うね」

社長は雷輝の話を聞いていなかった。小型録音機を奪うことを諦めず、殴りかかってきた。雷輝も流石にこれ以上付き合っていられないので、殴り返して気絶させた。

そして少佐に、小型録音機と社長をセットでプレゼントした。

雷輝は個人的な感情で『労働の対価を払わないこと』を責めたが、やはり苗床を呼んだことが一番の罪になるだろう。国家への反逆。外患罪だ。

ところが、この国に死刑制度はなかった。死刑の代わりに、社長は懲役一億年になった。刑務所で強制労働だ。

今回の件に神聖帝国が関わっているという証拠は、社長の自供だけ。神聖帝国そのものを断

罪するには弱すぎる。マガツ誘導装置の残骸が森から見つかったが、神聖帝国が知らぬと言い張れば、それまでだ。

神聖帝国の殺し屋が社長を殺しに来たところを捕まえるという手もあったが、一向に現れなかった。社長はずっと強制労働である。

そして雷輝は、苗床討伐の報酬として一億ラエルを受け取った。同時にトルウェノ全域における採掘権も。

この一億を元手に、オリハルコン採掘を行なう。

独立後、一発目のビジネスとしては、まずまずの結果と言えるだろう。

「しかし、いまいちスリルが足りなかったな。最初から最後まで予定調和だ。早く力をつけて、もっと大きなビジネスをしたいものだ」

雷輝はホテルのレストランで、シヅルに向かって呟いた。

「まあ、お兄様ったら、本当に欲深いお方ですね。そんなところが素敵なのですが……結局のところ、それが本音なのでしょう？」

「本音？」

いまいち妹の言っていることが分からず、雷輝は問い返した。

するとシヅルはムスッとした顔を浮かべた。

「空を救う。そのために勇者になって、一流商社の出世コースに乗って、今度は独立して……

お兄様はいつも、より困難な道に向かっていきます。その理由を今、暴露しました。スリルが欲しいのでしょう？　神聖帝国が作った今のシステムをぶち壊して空を救う……それが最も困難な道だから歩んでいるんでしょう？　シヅルは付いていくのが大変です」

「そんなことは……」

ない、と断言したかったが、妹には嘘をつきたくなかった。

「ああ、そうかもしれないな。勇者だった頃も言われたことがある。お前はギャンブラーだって。けど、平和な世界を作りたいってのは本気なんだ。俺たちは恵まれている。過去はともかく、今はこうやって笑っていられる。でも、この空には笑顔を知らない者が沢山いる。俺は人間もエルフも獣人もリザードマンも吸血鬼もドワーフも、それ以外の全ての種族も含めて救いたい。これは本気なんだ」

雷輝がそう語ると、シヅルの表情は一変し、澄まし顔になった。あなたのことは何でも知っていますよ、という顔だ。どうやら怒っていたのは冗談だったらしい。

「ええ、分かっています。お兄様の欲深さは知っています。ロレンス商会の社長など比べものになりません。男はそうあるべきです。だからシヅルはお兄様のあとを付いていくのです。わたくしが後ろから支えていますから、お兄様は気にせず突き進んでくださいませ」

第三章　吸血鬼の王国

梵珠王国の王都、阿闍羅。

それは梵珠王家が住まう地であり、この国の政治と経済の中心地でもある。あらゆる機能が集中した巨大都市。高層ビルが広がる摩天楼。

二年前まで雷輝が勤めていた満岡商事の本社ビルも、この阿闍羅に建っている。建設された当初は、五十メートル級の高層ビルがまだ珍しく、満岡商事ビルディングといえば、他社のサラリーマンから羨望の眼差しで見られていたという。だが半世紀が経ち、今では百メートルを超える超高層ビルも珍しくない。

雷輝は自分のオフィスから、満岡商事の本社を見下ろしていた。

トルウェノで苗床を倒してから二年。雷輝は超高層ビルの一つの階を丸ごと借り切り、そこを本社としていた。

株式会社　凱旋計劃。

その名前の意味を多くのビジネスマンは「勝ちに貪欲な天堂雷輝らしい」くらいにしか考えていなかった。実際、本当の意味は、限られた者にしか知らせていない。

そもそも凱旋計劃のオフィスには、十数人のスタッフしかいない。だが全員が十人分の働きをしてくれる。このフロアに百人以上いるのと同じだった。そして人数が少ないから、無駄な会議も省ける。

かつて雷輝が満岡商事にいた頃は、いくら成績を上げても、しょせんはサラリーマンだった。元勇者という肩書きのほうが有名だった。だが今は、ビジネスマン天堂雷輝としても有名になっている。

オリハルコンの採掘は順調で、買い手のところに運ぶ輸送船も自前で所有している。それで儲けた金を、株式市場や先物取引に突っ込んで増やしてきた。有望な企業を買収し、更に成長させてきた。

凱旋計劃を上場しないかという誘いは何度もあったが、全て断った。上場すれば資金は流れ込んでくるが、会社が株主のものになってしまう。それでは雷輝が独立した意味がない。上場などしなくても、金はいくらでも儲けることができるのだ。

全ては順調だったが、しかしマギメタル採掘は、トルウェノのオリハルコン以降、手を出していない。

あのオリハルコンは棚ぼたのようなものだ。あんな都合のいい状況が常にあるわけではない。神聖帝国と正面からやり合って鉱区を手に入れるには、もっと力が必要だった。

「社長、電報が来てます。トルウェノのポーションを買いたいというオファーです」

そう言って社長室に入ってきたのはセフィアだった。彼女は今、雷輝の秘書と運転手と護衛を兼任している。

本来、雷輝に護衛など必要ないが、社長自ら積極的に戦闘するのは、ビジネスマンとして格好が付かないのだ。それにセフィアは雷輝の指導で、二年前より遥かに強くなった。秘書としても立派にやっている。

この二年で立ち居振る舞いが洗練されてきたし、スーツ姿も様になった。

「なるほど。悪くない条件だな。念のため堀内にチェックしてもらってくれ」

堀内というのは、化学製品のエキスパートだった。彼もまた満岡商事の出身で、化学品本部のエースだった。しかし雷輝と同じく大企業に息苦しさを感じていた。そこをヘッドハンティングしたのだ。

「それが……既に堀内さんに見てもらったんですが、これはダミー企業で、本体は神聖帝国の企業だと言うんです。神聖帝国軍はこのところマガツとの戦闘が続いていて、深刻なポーション不足らしくて」

「それでうちを頼ってきたのか。本当に逼迫してるわけだな。じゃあ売るな。奴らは恩知らずだ。助けてやっても得はない。それにしても、俺に言われる前に堀内にチェックさせるなんて、俺の秘書らしくなってきたじゃないか」

雷輝が褒めると、セフィアは顔を赤くし、猫耳をピクンと動かした。

「からかわないでください雷輝社長……二年も経ったんだから、このくらい当然です……」
ライキを雷輝と発音する梵珠訛りもいつの間にか身につけていた。海外の者と会話するときはしっかりライキに戻し使い分けているのだから大したものだ。
「別にからかっちゃいないさ。本当に褒めてるんだ。俺は君の兄貴に頼まれているからな。世界で通用する女性にしてくれって。君はもう、どこに出しても恥ずかしくない立派なレディさ」
するとセフィアはますます赤くなった。コホンと誤魔化すように咳払いし、次の要件を切り出す。
「あと、電報の件とは別に、ポーション工場を拡張したいと堀内さんが言っています。増産しないとこれからの需要に応えられなくなると」
「だろうな。俺もそう思っていた。それに関して詳しいレポートを出すよう堀内に伝えてくれ」
「かしこまりました。それとエルティア共和国に行った田所さんからも連絡がありました。やはり向こうでは梵珠王国の中古車の人気が凄いらしいです。かなりまとまった数をさばけそうだと言っていました」
「本当に優秀な社員ばかりだ。俺はいらないんじゃないかと思えてくるよ」
「冗談を言わないでください。社長がいるから、皆、リスクを恐れずに突っ込めるんです。何かあっても社長がリカバーしてくれると信じていますから」
「リカバーした覚えなんてないがね。全員、いますぐ独立してもやっていける人材だよ。それ

で要件は終わりかい？」
「いえ、シヅルちゃんからも電話が……社長に会いたいと、涙ながらに連呼していました」
「困った奴だな。一週間会っていないだけじゃないか」
凱旋計劃は、シヅルがかつて勤めていた八嶋魔導重工の株を51％取得し、傘下に収めた。そして八嶋魔導重工で作っている『とある新製品』の開発のため、シヅルは出張中だった。あともう一週間で出張は終わる予定だ。兄離れのため、頑張ってもらいたい。
「シヅルちゃんの気持ちは分かります。私も、社長と一週間も会えなかったら……その……」
セフィアは何やらモジモジし始める。猫耳と尻尾がピコピコと動き回る。
雷輝はそれに気づかないふりをした。雷輝は今、二十六歳。セフィアとは八歳も離れている。彼女が美少女で、そして優秀な秘書、かつ剣士なのは認める。だが恋愛対象としては考えていなかった。
シヅルもセフィアも、早く別の男を見つければいいのに。雷輝はいつもそう思っていた。
「ところでセフィア。お母さんの容態はどうだ？　トルウェノに帰ってきて半年経ったが、変わりないか？」
「はい。おかげさまですっかり元気になりました。兄と二人で工房の仕事をしています。この前、手紙と一緒に写真が来ました。全て社長のおかげです。兄と母も感謝していました」
「前にも言ったが、俺はきっかけを作っただけだよ。まあ、元気でやっているなら何よりだ。

ポーション工場を拡張するなら、下見のために一度トルウェノに行こうか。これから忙しくなるから、今のうちに行っておかないと」

「分かりました。確かに次のプロジェクトは、あの苗床狩りに匹敵するスケールになりそうですからね」

「おいおい。あんなのボーイスカウトのピクニックみたいなものさ。それじゃ困るんだ。実際、あの程度じゃ済まないだろうしね。何もかもが桁違いだと思ってくれ」

それを聞いて、セフィアは顔に緊張を浮かべる。

そう。雷輝が率いる凱旋計劃の次の大プロジェクトはもう決まっていた。

ターゲットはリリーブラッド王国。吸血鬼が支配する国家だ。

※

円卓の間で神託会議が開かれていた。

神託会議。それはギドラニア神聖帝国政府の最高意思決定機関である。

ギドラニア神聖帝国は建前上、神によって統治されている。教皇と枢機卿たちがその神託を聞いて国家を運営していることになっている。

もっとも、流石に誰も本気にしていない。神託会議は名前とは裏腹に、教皇と枢機卿たちが

行なうまともな会議だ。それが神聖帝国の最高意思決定の場なのだ。
出席者は、最高権力者である教皇と、それを補佐する八人の枢機卿。
枢機卿たちはそれぞれ、内務省、外務省、法務省、財務省、軍務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省の長である。
ギドラニア神聖帝国は、世界で唯一の超大国。その権力者とはつまり、世界を支配する力を持っているということだ。ここに集まった九人は権力の化身なのだ。
そんな神託会議で、とあるビジネスマンが話題に上がった。
元七大勇者の一人、ライキ・テンドウのことだ。
「あの男、なんとかならんのかね？」
教皇のぼやきは、ここにいる全員の共通認識だった。
ライキはこの二年で信じがたいほど資産を膨らませていた。
とはいえ、たんに金を持っているというだけなら脅威ではない。彼以上の金持ちはいくらでもいる。また、オリハルコン鉱山を取られたのは悔しいが、一つや二つくらいは無視できる。
問題なのは、ライキがたった二年で今の状況を作り上げたことであり、そして彼の攻勢がこれからも続くだろうということだ。
しかもライキがオリハルコンを掘っているトルウェノ島は、ポーション製造工場が建設されたせいで、めざましい経済発展を遂げた。もちろん、作ったのはライキが経営する凱旋計劃だ。

ロレンス商会も雷輝が買収し、トルウェノの経済を支配している。
「マギメタルの採掘権は、神聖帝国が牛耳るというのが基本方針だろう。我々に友好的な者になら、小さい鉱山をくれてやってもいいかもしれない。しかし、あの男は明らかに敵対的じゃないか。いい加減に目障りだ。なにかこう、適当な理由をつけてトルウェノごと焼き払えないのか？」
教皇はシンプルな解決策を口にする。それが可能だったら、どんなにいいことだろうか。
それに対し、内務省を担当する枢機卿――内務卿――が回答する。
「ライキ・テンドウの不在を狙ってトルウェノを滅ぼすのは簡単でしょう。しかし、その場合、ライキがどんなアクションに出るか。忘れてはならないのは、彼が元勇者だということです。しかも最強の勇者です。ライキを倒すには、現役の勇者を犠牲にする必要があるでしょう」
「奴が勇者だったのは何年も前だ。とっくに腕が錆び付いているんじゃないかね？」
「それはどうでしょう。二年前、単騎で苗床を消滅させたことから考えて、希望的観測はしないほうがよいと私は判断します。更に困ったことに、ライキ・テンドウの活躍を、神聖帝国の国民が忘れていないということです。彼は未だに国民に人気があります。並のアイドルなどより余程ファンが多いのです。そのライキと現役勇者を激突させたと知れたら、教皇。次の選挙に響きますよ」
そう言われ、教皇は唸るしかなかった。

そうだ。教皇は国民投票によって選ばれるのだ。

立候補できるのは司祭以上の聖職者だけと決まっているが、民主的に選ばれている。

神による統治を謳っているだけあり、神聖帝国の行政機関は神職者だらけだ。地方議会や各省庁で実績を積み、名声を得てから、教皇選挙に立候補する。そうやって選ばれた教皇が、八人の枢機卿を任命する。

教皇は当然、自分の派閥の者を枢機卿にする。つまり教皇の首がすげ替わった場合、ここにいる八人の枢機卿は職を追われてしまう。なんとしても回避しなければならない未来だ。

「皆さん。トルウェノが話題に上ったので、丁度いいタイミングです。見てもらいたい写真があります」

軍務卿はそう言ってから照明を暗くし、プロジェクタを使って白い壁に一枚の写真を映した。

雲海に浮かぶ戦艦の写真だった。

「これは……？」教皇が質問する。

「トルウェノの近くで、軍の情報部が撮影した写真です。ご覧のとおり戦艦です。言っておきますが、神聖帝国軍の所属ではありませんよ」

「するとトルウェノ軍のものか⁉」

一同はざわめく。トルウェノが発展しているのは知っていたが、まさか戦艦まで保有しているとは思っていなかったのだ。

「所属はトルウェノ軍です。しかし凱旋計劃がエルティア共和国の払い下げを買って改修し、トルウェノに貸し出しているようです」
「エルティア共和国の中古か……あそこの兵器もまあまあ優秀だが、旧型一隻ならさほど脅威にもならんな」
「いえ。専門家の分析の結果、ほとんど原型がないくらい改造されていると。おそらくシヅル・テンドウの仕業でしょう。武装を見る限り、我が軍の最新鋭戦艦とも互角に戦える可能性が高いそうです」
「シヅル・テンドウ……そうか、あの子はライキの妹だったな」
文部科学卿が忌々しげに呟く。
八歳で博士号を取った天才のことは神託会議のメンバーも知っていた。彼女を育てたのは神聖帝国の大学だ。なのに今、彼女は神聖帝国の敵になっている。皮肉にしても酷すぎる。
「更にトルウェノの軍とハンターですが、この二年で全体の練度が跳ね上がっています。武器の質もいい。これも間違いなくライキの仕業でしょう。もともと獣人は私たち人間より身体能力が高い傾向があります。それが逆に、技よりも力に頼った戦い方を生んでいたのですが、今では技も磨いています。正直ここまで来ると、小さな鉱山を奪うために戦うのは割に合いません。トルウェノだけでも面倒なのに、その後ろに元勇者が控えているとなればなおさらです」
軍務卿の報告は、憂鬱なものだった。しかし事実だと誰もが理解していたので、黙って苦虫

を噛み潰したような顔をするしかなかった。
「あの、私からも報告があります。エルフスタンへのＯＤＡの件です」
外務卿が手を上げた。
ようやく朗報か、と誰もがホッとした顔になる。
エルフスタンとはその名のとおり、人口のほとんどがエルフで構成されている。未だ森の中で原始的な生活を続ける未開の国だ。
そのエルフスタンに神聖帝国はＯＤＡを送った。ＯＤＡとは簡単に言うと、発展途上国のために先進国が行なう援助のことだ。
何千億ラエルという税金が使われた。しかし、この全額がエルフスタンに届くわけではない。そのうち10％は教皇と八人の枢機卿たちで分け合った。残った90％のＯＤＡで、エルフスタンは神聖帝国の建設メーカーにインフラ整備を発注。更に石油採掘と、精製施設、大型タンカーを停めることのできる港などをパッケージにした石油コンビナートの建設計画も進んでいる。
教皇と枢機卿たちは、建設メーカーからも『お礼』をもらった。
「工事は順調のようです。エルフスタンは更に鉄道の工事もしたがっています」
「いいじゃないですか。どんどんやりましょう」
財務卿が笑顔で言う。
「ええ、それは問題ないのですが……ライキ・テンドウのことです」

「何だ？　まさか奴はエルフスタンの工事まで邪魔しているって言うんじゃないだろうね」
教皇はいらつきと不安を混ぜたような声を出す。
「違います。そうではありません。ただ気になることに……ライキはエルフスタンから工事を請けおった建設メーカーの株を、公式発表より前から買っていたようなのです。それも目立たないように、複数の名義に分けて。そして発表後、株価がピークに達した瞬間に売り抜けています。彼は事前に情報を掴んでいたとしか思えません」
今度こそ神託会議は沈黙で包まれた。
彼が強いのは嫌と言うほど知っている。商売が上手いのも承知だ。しかし、これはどうしたことか。一体どこから情報が漏れたのだろう。単純な戦闘力や経済力より、ずっと不気味だった。
「奴の話は一旦やめよう。始末するにしても、それなりの理由と入念な準備が必要だ。それより、今日の会議はまだ議題が残っている。建設的な議題だ」
教皇の言葉に全員が頷く。
「では私から説明させていただきましょう」
経済産業卿が立ち上がる。
「皆さんご存じのように、リリーブラッド王国には『暗黒水晶』の鉱山があります。それもかなりの規模です。これを逃す手はありません。ですがリリーブラッド王国は、吸血鬼が支配する国です。吸血鬼と契約するなど、国民が許さないでしょう」

なぜならギドラニア神聖帝国は人間の国だ。人間の多くは、吸血鬼を忌み嫌っている。血を吸われるのだから当然だろう。

特に神聖帝国の国民は、吸血鬼が神々の敵であり、マガツの仲間だと本気で信じている。

教皇や枢機卿たちがどう思っているかは問題ではない。

吸血鬼とビジネスなどしたら、最悪、暴動が起きかねない。

「鉱物資源の確保は経済産業省の仕事です。国外の鉱山を開発する場合は、外務省と連携して行なってきました。しかし今回は外交を行なうわけにいかないので、軍務省の力をお借りします」

経済産業卿は横目で軍務卿をチラリと見る。すると軍務卿は静かに頷いた。

「どうやら二人の間では話がまとまっているようだね。しかし私はピンと来ていない。他の皆もそうだろうから、分かりやすく説明してくれないかな？」

教皇の質問に、経済産業卿は軽快に答え始める。

「簡単なことです。我がギドラニア神聖帝国の国民は、吸血鬼など全て死んでしまえばいいと考えています。リリーブラッド王国には人間も住んでいますが、吸血鬼と一緒に暮らしているような連中は吸血鬼と同じだという思想が主流です。つまりリリーブラッド王国を攻撃するのにお膳立ては不要です。今すぐ仕掛けても支持率には響きません。一人残らず皆殺しにしましょう。そうすれば彼らと契約する必要はなく、荒野になったリリーブラッド王国で、我が国の企業は快適にマギメタル採掘を行えます」

経済産業卿は夕飯のレシピでも語るかのような声だった。

すると周りから「それはいい考えだ」という賛同が上がる。基本方針はこれで決まった。

「だが問題は手段だよ。吸血鬼は強い。その強さは夜限定だが、夜は必ずやってくる。太陽が昇っているうちに終わらせることができるならいいが、我らが神聖帝国軍といえど、それは無理だろう。だから今までリリーブラッド王国との直接的な戦闘は避けてきた。最終的に勝てても、損耗が大きすぎては意味がない。国家の利益のためにマギメタルが欲しいんだからね」

「はい教皇猊下。これに関しては私に策があります」

軍務卿が説明を引き継ぐ。

そしてプロジェクタにとある資料を映した。それを見た一同は、「これは……」と驚きを露わにする。

国を一つ消すことを躊躇しない彼らにとっても、それは禁忌に近かった。

「出来たてホヤホヤの試作機です。想定スペックは書いてあるとおり。技術部が実験をさせろと熱心に要請してきていまして……私としてもやらせてあげたいのです。リリーブラッド王国を実験場にしましょう」

「しかし、我々がこんなものの研究をしていると知られたら……」

「ご安心ください。絶対に情報は漏らしません。これを起動したら吸血鬼といえど死ぬしかないし、これを作った罪そのものを吸血鬼に押しつける算段もあります。やらせてください。教

皇猊下。マギメタルと新型兵器の実験……ここは一石二鳥といきましょう」

流石の教皇も即答できなかった。

誰もが数十秒の思案を必要とした。

だが、最終的にその計画は承認された。結局のところ、彼らは力が欲しかった。新型兵器が力を持っているなら、どれほどのものか見てみたかった。

その新型兵器の名は、ガンバレル型シャイニングトラペゾヘドロン――。

※

『脱サラした元勇者は手加減をやめてチート能力で金儲けすることにしました』

全力試し読み版をお読みいただきありがとうございました。

続きは12月発売の本編でぜひお楽しみください！